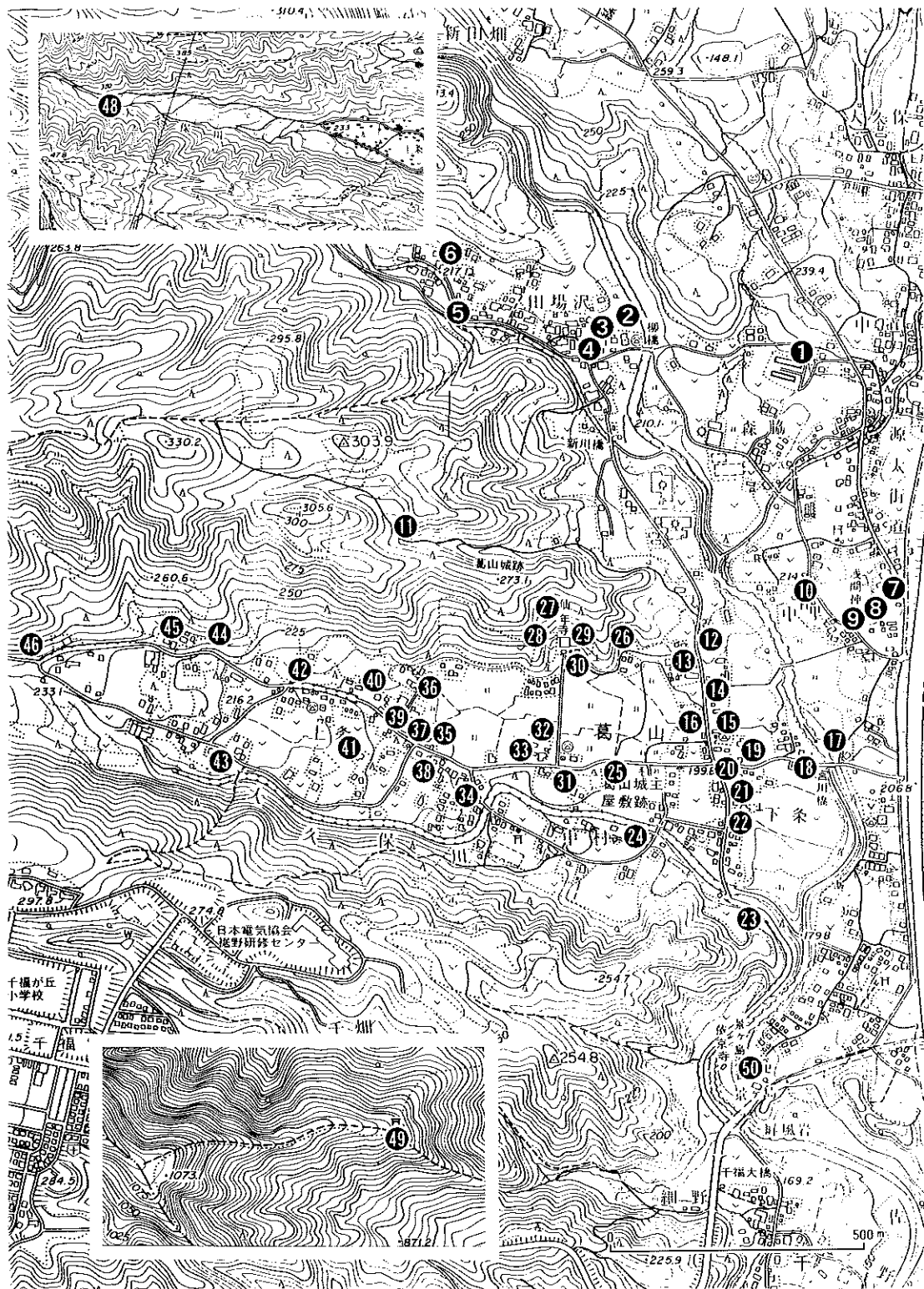


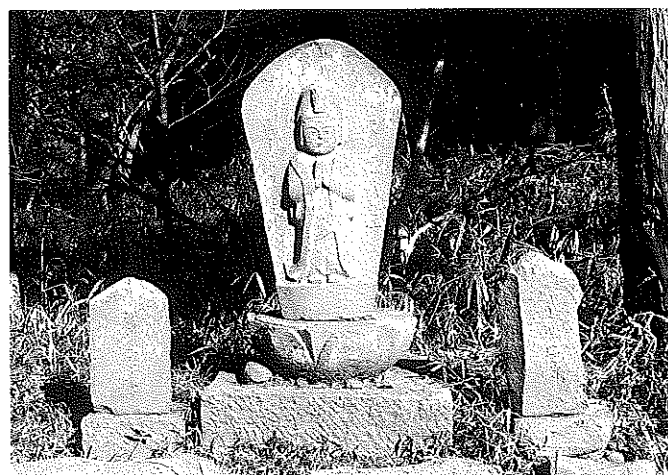
葛 山 地 区



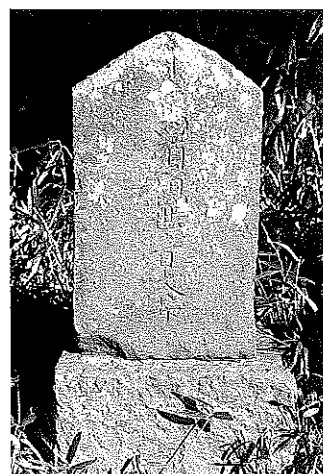
葛山地区



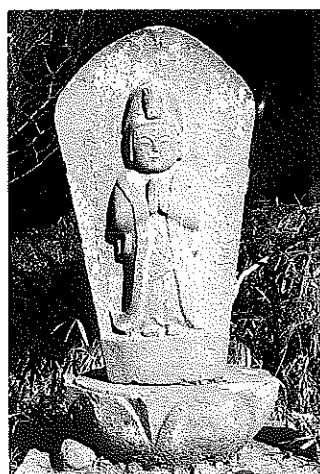
1 馬頭観音



2 田場沢公民館



2-3 馬頭観音



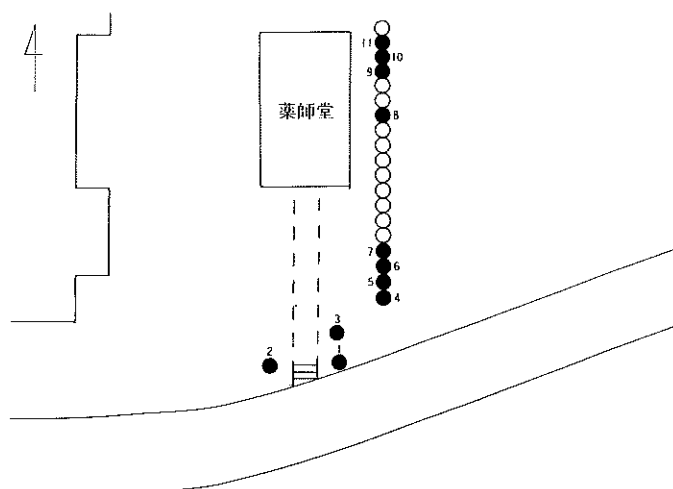
2-2 馬頭観音



2-1 馬頭観音



3-1 石灯笼



3 薬師堂



3-3 手洗石



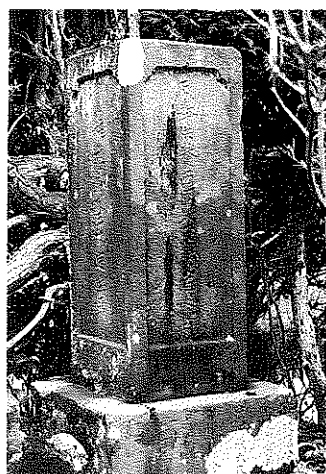
3-2 万霊塔



3-6 万霊塔



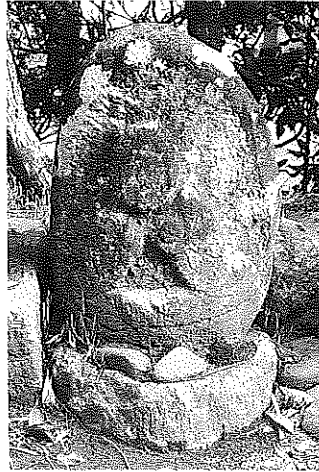
3-5 如意輪観音



3-4 順礼供養塔(西・坂・秩)



3-9 馬頭観音



3-8 石造物（不明）



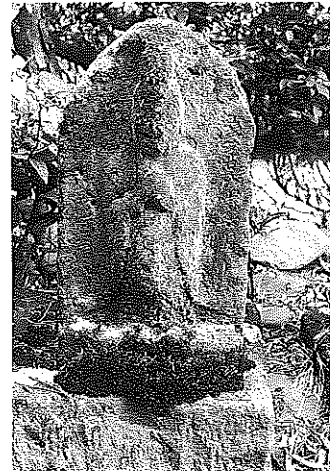
3-7 順礼供養塔（秩・西・横）



4-1 庚申塔（部分）



3-11 馬頭観音



3-10 馬頭観音



4-4 庚申塔



4-3 庚申塔（部分）



4-2 道祖神



5-2 馬頭観音



5-1 碑(田場澤川防災工事竣工記念)



7 馬頭観音



6 馬頭観音



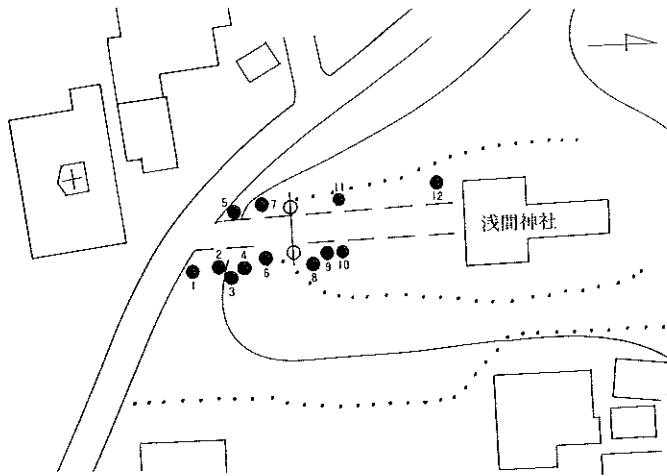
8-3 庚申塔



8-2 地藏菩薩



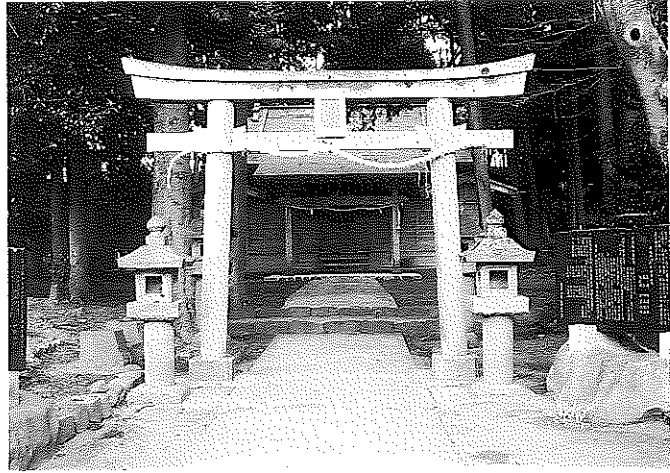
8-1 道祖神



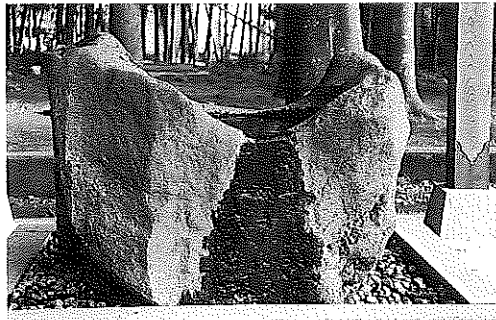
9 浅間神社



9-1 神社標石



9 浅間神社境内



9-3 手洗石



9-2 碑 (玉垣建設の記念)



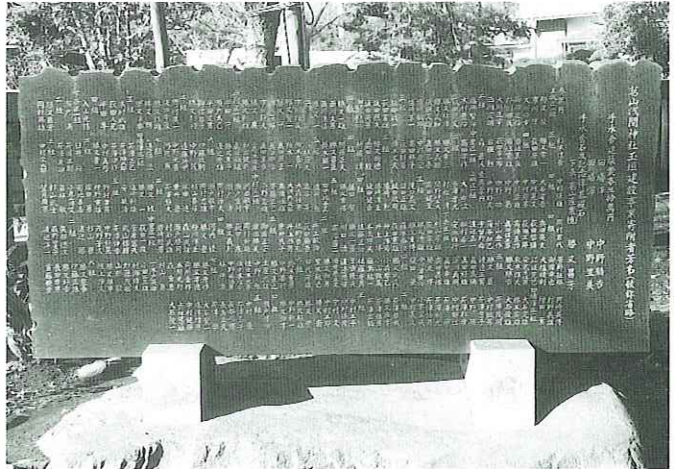
9-6 石灯籠



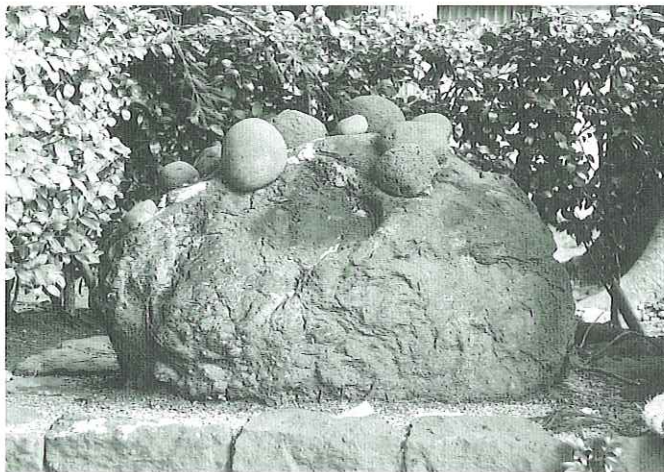
9-4 碑 (拝殿屋根一部改修)



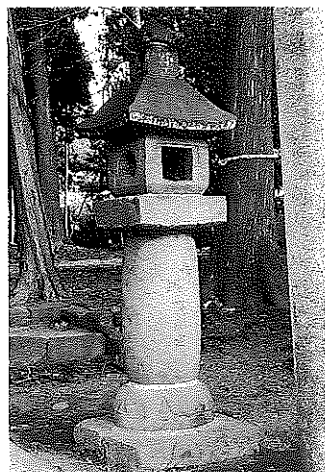
9-7 石灯籠



9-5 碑 (玉垣記念事業)



9-8 諸神 (乳房の神)



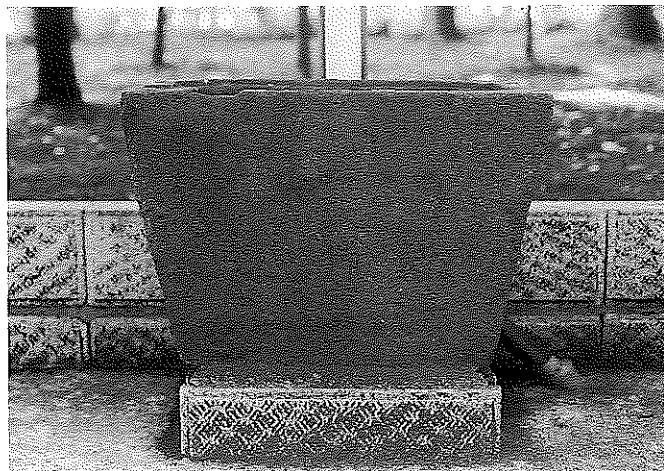
9-10 石灯笼



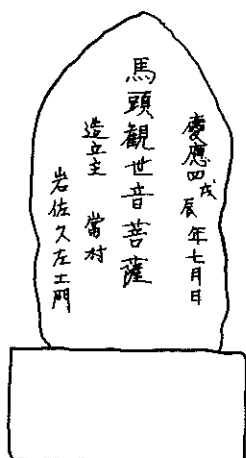
9-9 手洗石



9-11 石灯笼



9-12 手洗石



12 馬頭觀音



11 水神塔



10 木食名号塔



葛山508 勝又氏邸内



14 馬頭觀音



16-2 道祖神



16-1 道祖神



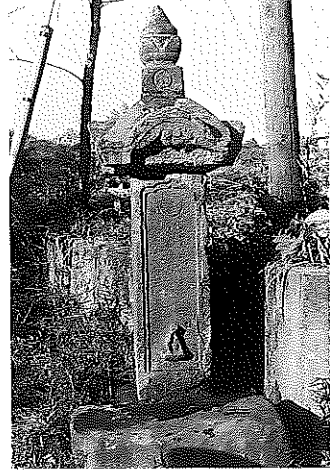
15 秋葉山供養塔



18-2 碑 (記念碑誌)



18-1 碑 (宮川橋記念)



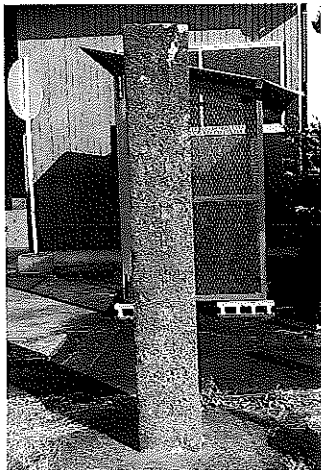
17 庚申塔



19-2 馬頭観音



19-1 馬頭観音



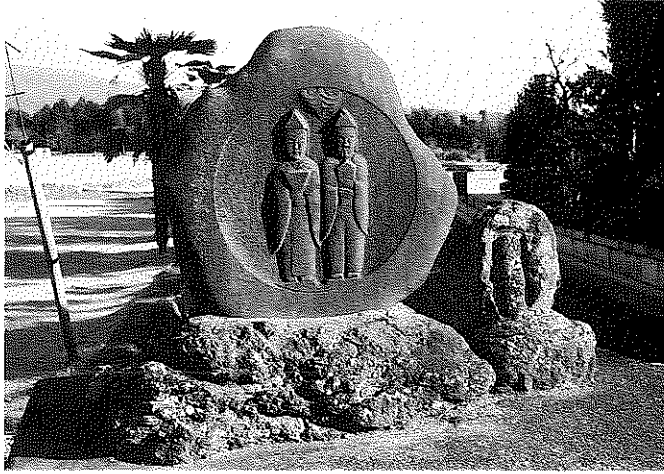
20-3 幟立



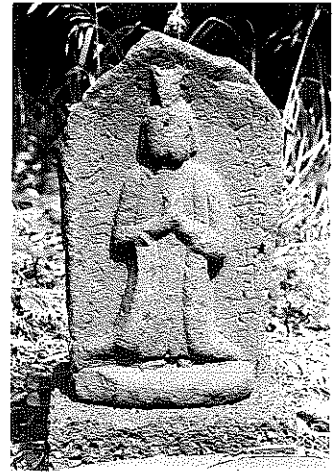
20-2 碑 (道路記念)



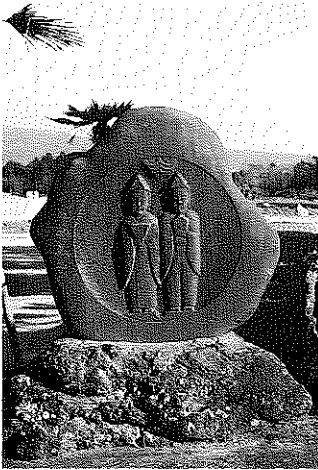
20-1 碑 (道路記念)



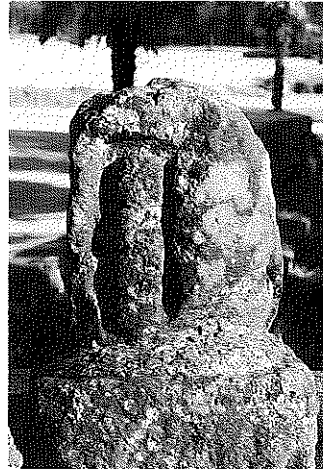
22 葛山攻城



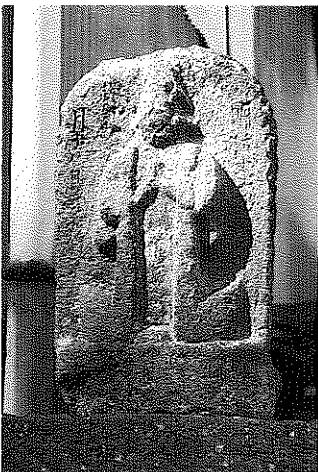
21 馬頭観音



22-2 道祖神



22-1 道祖神



24 馬頭観音



23-2 馬頭観音



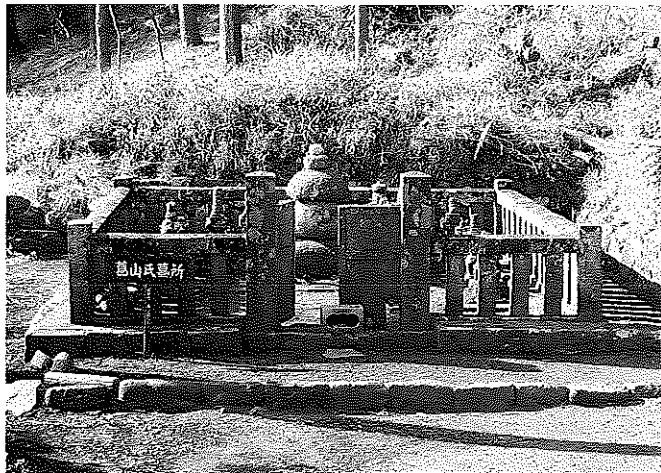
23-1 道祖神



26 馬頭観音



25 馬頭観音



27 葛山氏墓地



29-2 石灯籠



29-1 石灯籠



28 水神塔



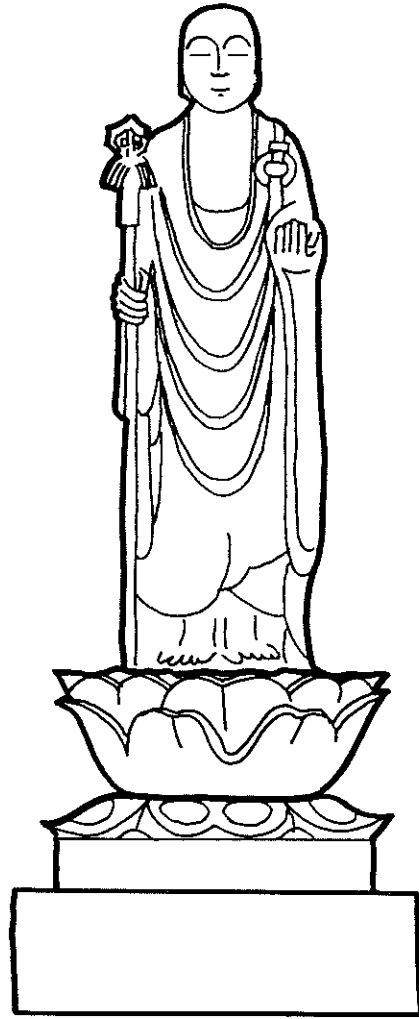
29-5 供養塔



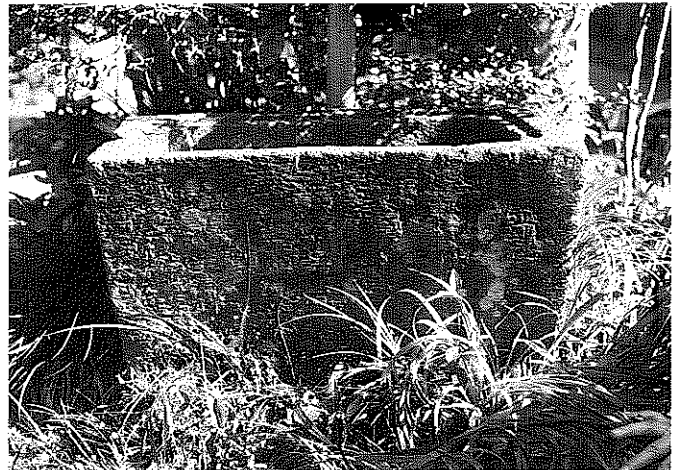
30 万靈塔



31 追善供養塔



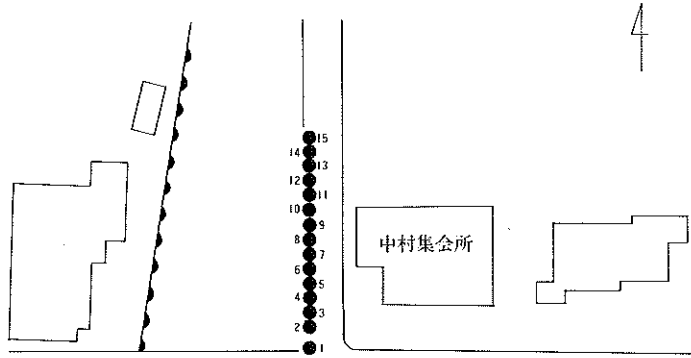
29-3 地藏菩薩



29-4 手洗石



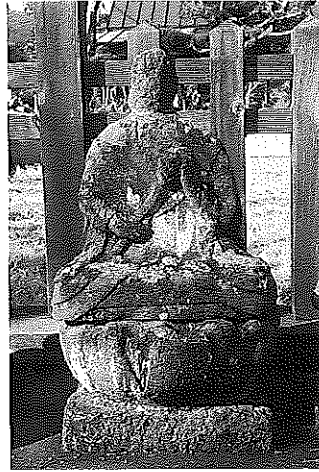
32-1 寺院標石



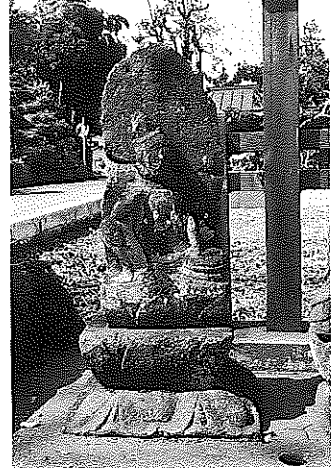
32 中村集会所



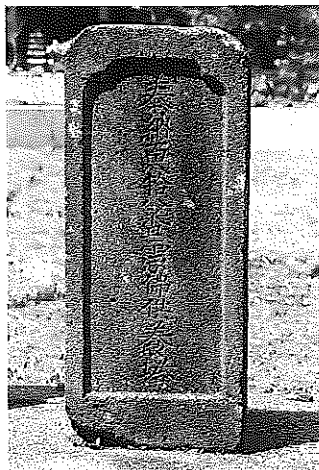
32-4 順礼供養塔(横)



32-3 聖観音



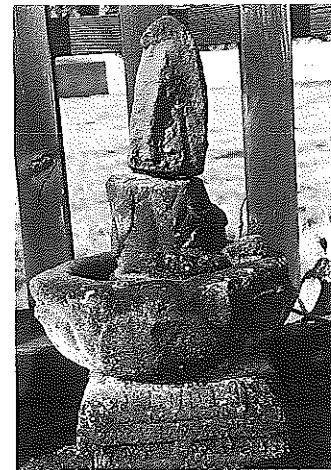
32-2 如意輪観音



32-7 順礼供養塔(秩・坂・西・四)



32-6 聖観音



32-5 石造物(不明)



32 中村集会所



32-10 順礼供養塔(横)



32-9 供養塔



32-8 順礼供養塔(西)



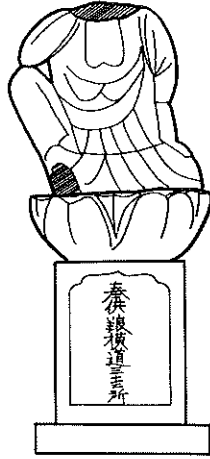
32-13 順礼供養塔(坂・秩・横・地藏)



32-12 馬頭観音



32-11 庚申塔



32-15 順礼供養塔（横）



32-14 順礼供養塔（西）



33-3 道祖神



33-2 石造物（不明）



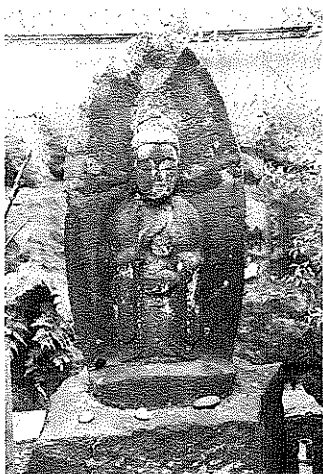
33-1 道祖神



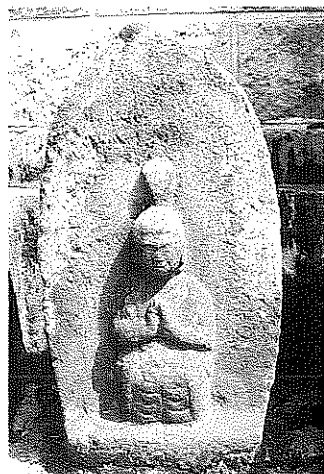
35 宝篋印塔（部分）



34 馬頭観音



39 聖観音



37 馬頭観音



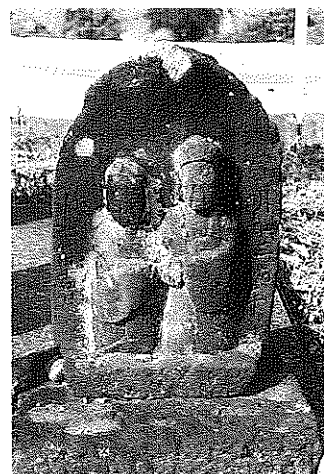
36-1 馬頭観音



40 八幡宮入口



40-3 道祖神



40-2 道祖神



40-1 馬頭観音



40-5 幟立



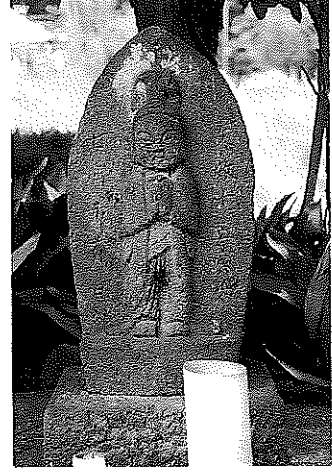
40-4 庚申塔



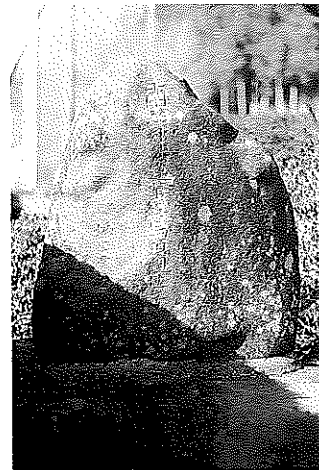
43 馬頭観音



42-2 水神塔(石祠)



42-1 馬頭観音



45 馬頭観音



44 馬頭観音



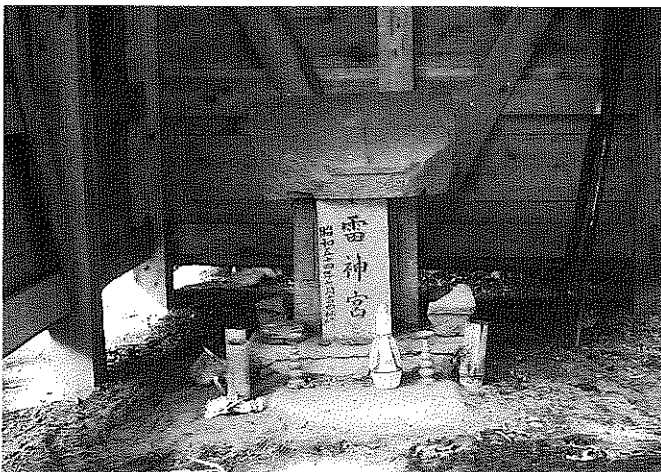
46 林道入口



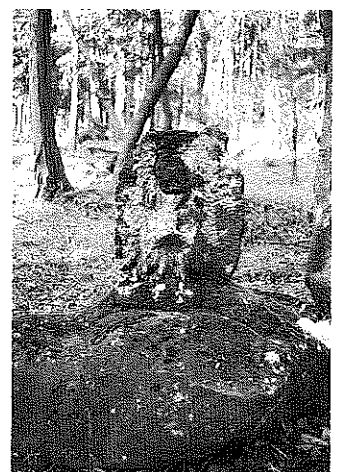
46-2 馬頭観音



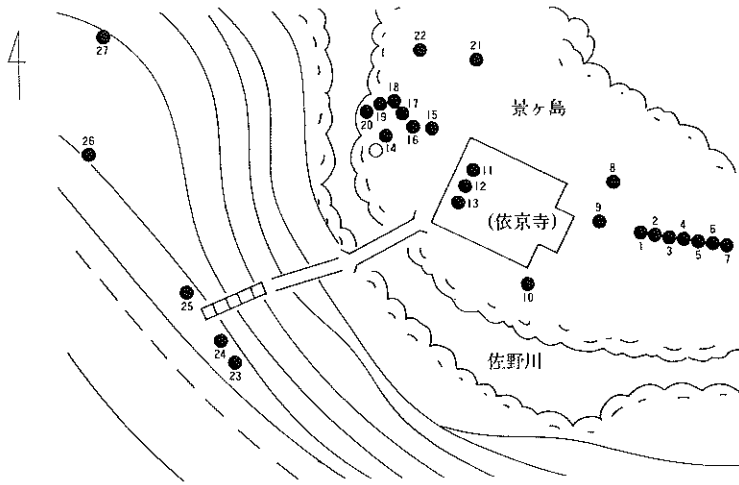
46-1 馬頭観音



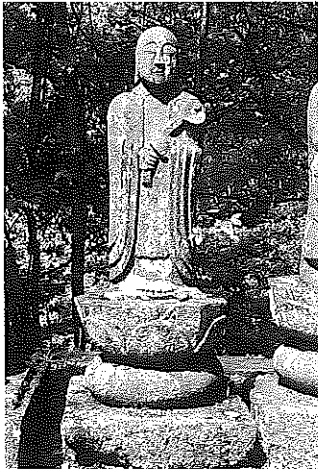
49 諸神 (雷神宮)



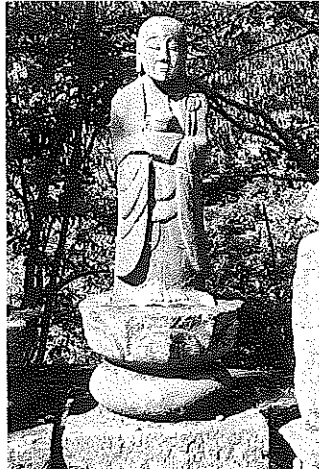
48 道祖神



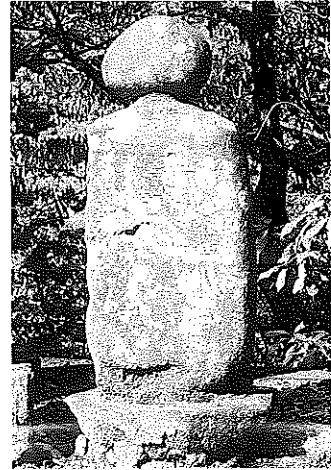
50 景ヶ島



50-3 地蔵菩薩



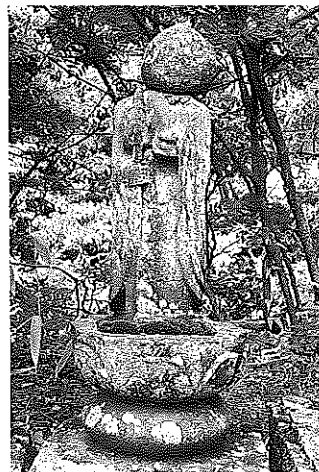
50-2 地蔵菩薩



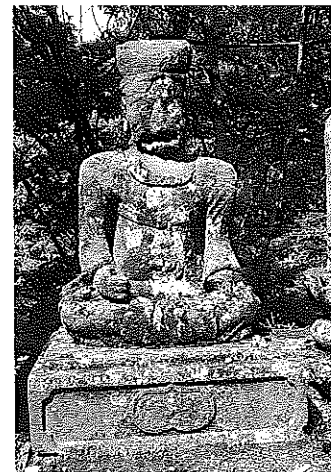
50-1 地蔵菩薩 (部分)



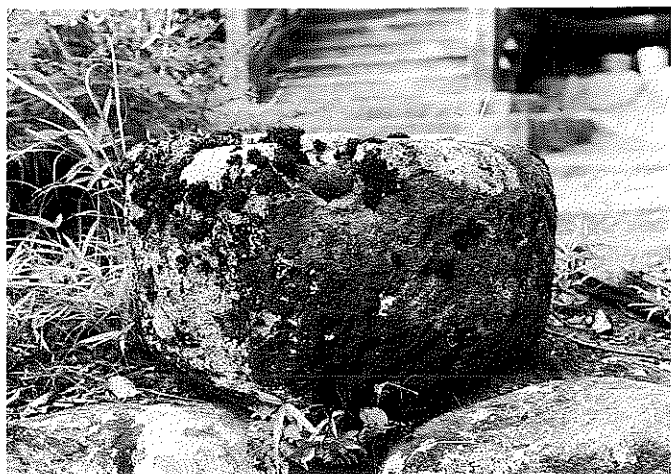
50-6 地蔵菩薩



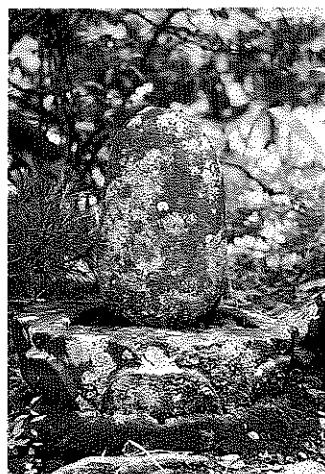
50-5 地蔵菩薩



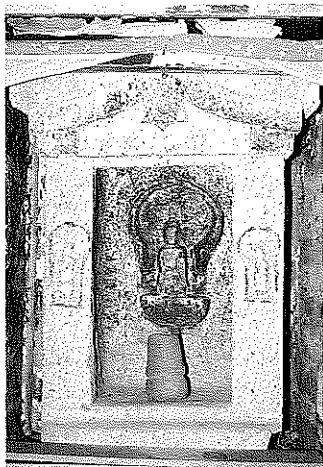
50-4 閻魔



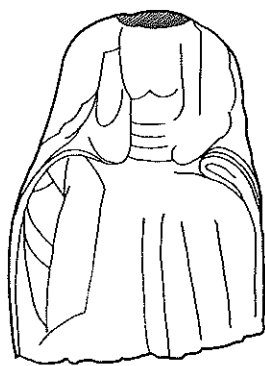
50-9 手洗石



50-7 地藏菩薩 (部分)



50-11 聖観音



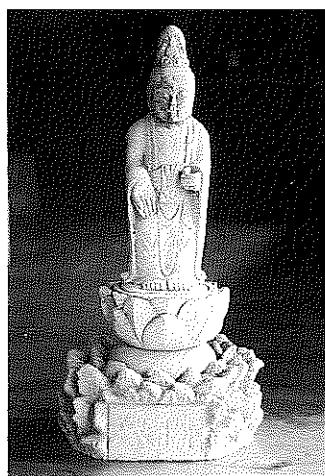
50-10 十六羅漢



50-8 万霊塔



50-14 万霊塔



50-13 聖観音



50-12 如来 (磨崖仏)



50-17 十六羅漢



50-16 十六羅漢



50-15 十六羅漢



50-20 徳因名号塔



50-19 十六羅漢



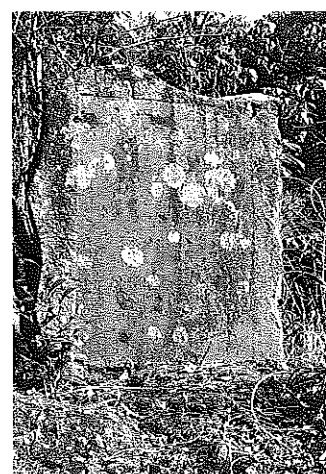
50-18 十六羅漢



50-23 十六羅漢



50-22 石 祠



50-21 碑 (開道架橋之記)



50-26 地藏菩薩



50-25 霊場標石



50-24 碑 (景ヶ島の景勝地記念)



50-27 地藏菩薩

葛山地区石造物一覽表

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
1	馬頭観音	舟型座像	大正8 (一九一九)	86×41	(正) 大塚 馬頭観世音 大正八年四月 (台座正) 富岡村葛山 施主 芹沢豊作四十才 外家内一回 願主 芹沢政國
2-1	馬頭観音	自然石	明治19 (一八八六)	55×26	(正) 馬頭観世音 明治十九年 一月吉日 施主 芹沢忠太郎
2-2	馬頭観音	舟型立像	文化5 (一八〇八)	122×71	(正) 文化五年辰十月日 施主 村中 (右) 世話人 杉本平左衛門 荻田織石衛門 (左) 芹沢源右衛門 岡村長左衛門 勝又宇兵衛
2-3	馬頭観音	駒型		53×30	(正) 馬頭観世音大菩提
3-1	石灯籠	灯籠	明和4 (一七六七)	149×69	(正) 薬師前 (背) 明和四亥七月八日 志主到營建之 (火袋部欠落)
3-2	万霊塔	自然石		143×94	(正) 三界萬靈
3-3	手洗石	自然石		47×57	
3-4	順礼供養塔 (西・坂・秩)	山型角柱	延享1 (一七四四)	129×71	(正) 奉供養西國坂東秩父百處巡礼 (右) 延享元年青龍甲子 (左) 穠七月十五日造立焉 (台座正) 芹沢源八郎 勝間田甚右門 中村源六良 芹沢清八郎 芹沢茂八郎 真田甚四郎 同行六人

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
4-2	道祖神 (双体)	立くり 像		89× 71	
4-1	庚申塔	自然石		39× 42	(正) 口圍塔 (中央部折損)
3-11	馬頭観音	浮彫立像	寛政12 (一八〇〇)	52× 28	(正) 寛政十二庚申年 七月吉日 葛山村 (光背部欠落・風化)
3-10	馬頭観音	舟型立像	宝曆8 (一七五八)	58× 41	(正) 宝曆八寅七月日 施主 清八 (頭部風化)
3-9	馬頭観音	舟型立像	文政2 (一八一九)	69× 44	(正) 文政二卯年 五月吉日 中村徳右衛門
3-8	石造物 (不明)	浮彫座像		53× 33	(風化)
3-7	順礼供養塔 (秩・西・横)	角柱	宝曆8 (一七五八)	81× 26	別記1 (25頁)
3-6	万霊塔	丸彫立像	宝曆12 (一七六二)	145× 70	(正台座) 三界万霊 宝曆十二 午仲秋造 相譽智傳比丘 樂譽極善 法子 受樂但心 法子 願主禪光
3-5	如意輪観音	丸彫座像		99× 60	(一部欠損)

8-2	8-1	7	6	5-2	5-1	4-4	4-3	番号
地藏菩薩	道祖神(双体)	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音	碑(田場澤川防災工 事竣工記念)	庚申塔	庚申塔	種類
舟型立像	舟型立像	舟型立像	舟型立像	自然石	板石	角柱 笠唐破風	角柱	形状
		大正8(一九一九)	明治34(一九〇一)	明治42(一九〇九)	昭和42(一九六七)	享保6(一七二一)	寛文12(一六七二)	造立年
61×46	57×44	121×50	60×33	50×29	267×223	134×55	98×50	法量(cm)
		別記5(253頁)	(正) 明治卅四年十月吉日 中村信太郎	(正) 馬頭観世音 明治四十二年八月吉日 中野為茂	別記4(252頁)	別記3(251頁)	別記2(251頁)	銘文
(舟型上部欠落)	(舟型一部欠落)		(舟型上部欠落)			(三猿浮彫・風化)	(宝珠・笠部欠落 風化 二猿浮彫)	(備考)

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
9-7	石灯籠	灯籠	延享1 (一七四四)	182 × 65	(正) 奉納 八幡大明神 御竈前 延享元甲子季 八月十五日 施主 勝間田傳右衛門 半田勝右衛門 坂田藤七郎 願主 荻田折右衛門 坂田四郎右衛門 市川新右衛門
9-6	石灯籠	灯籠	寛保1 (一七四一)	186 × 66	(正) 奉納 八幡大明神御竈前 寛保元年辛酉 八月十五日 施主菅村 若者中
9-5	碑 (葛山浅間神社玉 垣記念事業芳名)	板石		146 × 199	別記8 (254頁)
9-4	碑 (葛山浅間神社拝 殿屋根一部改修 増築の記)	板石	平成5 (一九九三)	162 × 226	別記7 (254頁)
9-3	手洗石	自然石		75 × 112	
9-2	碑 (葛山浅間神社玉 垣建設の記念)	板石	昭和61 (一九八六)	128 × 204	別記6 (253頁)
9-1	神社標石	角柱	昭和9 (一九三四)	247 × 123	(正) 幣帛 供進 富士山南口警司 村社浅間神社 (背) 昭和九年十一月建之 社掌 伊藤日栄
8-3	庚申塔	笄付角柱	宝暦2 (一七五二)	120 × 47	(正) 奉供 庚申寶塔 宝暦 壬申天十一月初三日 (右) 講中 井上惣三郎 遠藤勘七 眞田善九郎 遠藤久右衛門 (三猿浮彫) (左) 講中 勝間田八郎右門 眞田九七郎 佐々木市左門 仲野仁右門

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
9-8	諸神(乳房の神)	自然石		61×114	
9-9	手洗石	箱型	享保6(二七二一)	45×61	(正) 奉納御寶前 享保六辛丑六月日 葛山中里村 遠藤常備門
9-10	石灯籠	灯籠	寛保3(二七四三)	216×67	(正) 奉納 浅間宮 別當大善院 寛保三癸亥年 初秋吉日 施主 當村 若者中
9-11	石灯籠	灯籠	享保20(二七三五)	208×78	(正) 奉納 浅間宮 別當大善院 御神前 享保廿己卯年九月吉日 駿州葛山村 願主 平田七郎兵衛
9-12	手洗石	箱型	享保6(二七二一)	45×63	(正) 奉納御寶前 享保六辛丑六月日 葛山中里村 遠藤常備門
10	木食名豆塔	自然石		157×102	(正) 木食觀正 願主 當村中
11	水神塔	舟型座像	寛延3(二七五〇)	42×35	(正) 寛延三年 中冬吉日 (頭部風化)
12	馬頭觀音	自然石	慶応4(二八六八)	77×44	(正) 馬頭觀世音菩薩 慶應四戊辰年七月日 造立主 當村 岩佐久左衛門
13	宝篋印塔(部分)			49×36	(残存 相輪・基礎部)

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
14	馬頭観音	浮彫座像	明治7 (一八七四)	70×40	(正) 馬頭観世音菩薩 (右) 明治七年十月吉日 (左銘文判読不能 中央部割れ目補修)
15	秋葉山供養塔	灯籠	明治42 (一九〇九)	167×110	(正) 秋葉神社常夜燈 明治四十二年十二月二四日 発起者半田和七 北村 下條 中村 最寄中 (中台・火袋部補修)
16-1	道祖神(单体)	立くり像 拔	明治32 (一八九九)	85×61	(正) 明治三十二年三月建之
16-2	道祖神(单体)	立くり像 拔	文化8 (一八一二)	83×64	(正) 文化八辛未年 四月吉日 造立之
17	庚申塔	角柱 等唐破風	元禄6 (一六九三)	174×62	別記9 (256頁) (角柱位置相違 二猿浮彫)
18-1	碑(宮川橋記念)	板石	昭和3 (一九二八)	170×106	別記10 (256頁)
18-2	碑(記念碑誌)	板石	昭和55 (一九八〇)	218×162	別記11 (257頁)
19-1	馬頭観音	自然石	安政6 (一八五九)	74×60	(正) 馬頭観世音菩薩 安政六己未年八月日 造立主 當村源七
19-2	馬頭観音	舟型立像	天保14 (一八四三)	61×42	(正) 天保十四卯年 十一月吉日

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
24	馬頭観音	浮彫立像	明治12 (一八七九)	50 × 31	(正) 明治十二卯年 口月十八日 兼井新口 (光背上部欠落・風化)
23 2	馬頭観音	自然石	明治2 (一八六九)	84 × 68	(正) 馬頭観世音菩薩 明治二己巳年四月二十日 願主 敬白
23 1	道祖神	板石	昭和58 (一九八三)	100 × 77	(正) 道祖神 (背) 昭和五十八年十一月吉日 杉本信吾建之
22 2	道祖神 (双体)	立くり 像拔		126 × 121	
22 1	道祖神 (双体)	立くり 像拔		63 × 42	(風化)
21	馬頭観音	舟型立像	明治5 (一八七二)	54 × 26	(正) 明治五申十月十七日 勝間田源治郎
20 3	幟立		明治44 (一九一三)	157 × 32	(右) 明治四十四年十一月建之
20 2	碑 (道路記念)	板石	平成7 (一九九五)	129 × 70	別記13 (259頁)
20 1	碑 (道路記念)	板石	昭和8 (一九三三)	178 × 87	別記12 (258頁)

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘 文 (備考)
27 1 7	宝篋印塔			68 × 28	
27 1 6	宝篋印塔			51 × 20	(塔身正) □ (右) □ (左) □ (背) □ (相輪上部欠落)
27 1 5	宝篋印塔			69 × 26	(相輪上部欠落)
27 1 4	宝篋印塔			62 × 28	(塔身正) 卍 (右) 卐 (左) 卐 (背) 卐 (相輪上部欠落)
27 1 3	五輪塔			53 × 29	
27 1 2	宝篋印塔・ 五輪塔混合同			53 × 28	
27 1 1	葛山氏墓地石圍い		嘉永7 (二八五四)	120 × 485	(右) 御廟王垣發起 當村杵本儀右衛門 世話人 同御宿幸藏 同勝又茂兵衛 (左) 嘉永七甲寅年八月日 當寺三拾世 印譽上人代
26	馬頭観音	舟型立像	明和2 (二七六五)	73 × 34	(正) 〽 轉雄高縁登提 明和 西六月廿六日
25	馬頭観音	楯型	文久1 (二八六一)	72 × 46	(正) 馬頭観世音菩薩 文久元辛酉年七月 造立主 半田林平

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
27-16	宝篋印塔・ 五輪塔混合			69×25	
27-15	宝篋印塔			64×25	(塔身正) 卍 (右) 卍 (左) 卍 (背) 卍 (相輪上部欠落)
27-14	宝篋印塔		明德5 (一三九四)	58×23	(塔身正) 卍 (右) 卍 (左) 卍 (背) 卍 (基礎正) 性穩 禪門 明德四年 三月日 (相輪上部欠落)
27-13	宝篋印塔			75×23	(相輪部割れ目)
27-12	宝篋印塔		康応1 (一三八九)	79×29	(基礎正) 為逆修 造立祺 養所也 道源 (右) 康應元年十月 (左) 十五日 敬白 (塔身正) □ (右) □ (左) □ (背) □
27-11	宝篋印塔・ 五輪塔混合			81×30	
27-10	五輪塔			124×71	
27-9	宝篋印塔・ 五輪塔混合			86×32	(水輪正) □ (右) □ (左) □ (背) □
27-8	宝篋印塔・ 五輪塔混合			72×28	

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
27-17	宝篋印塔・ 五輪塔混合			63×27	
27-18	五輪塔			51×22	
28	水神塔	浮彫座像		75×53	(風化)
29-1	石灯籠	灯籠	正徳3 (一七二三)	230×87	別記14 (259頁)
29-2	石灯籠	灯籠	正保4 (一六四七)	230×85	(正) 日尊山 仙年寺物且那為口聖靈句也 不二法界平等利益口也 正保四丁亥六月下旬 本願要誓上人
29-3	地藏菩薩	丸彫立像	延享1 (一七四四)	198×71	別記15 (260頁)
29-4	手洗石	箱型	享保6 (一七二二)	42×69	(正) 寄進 施主 遠藤常右衛門 享保六辛丑年 六月四日
29-5	供養塔	櫛型	天保7 (一八三六)	100×55	(正) ◎ 謙普信十位 (右) 天保七丙申年正月十二日 (左) 信州中禰郡入野谷藪口村石工俗名北原弥喜四郎 行年六拾八才右塔工者 同人弟弥治右衛門 作之 造立世話人 御宿村勝又仁左衛門
29-6	名号塔	自然石	正保2 (一六四五)	148×48	(正) 名号塔 為有縁無縁三世法界平等利益之也 正保二乙酉大七月七日 施主要誓中心

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
29-7	力石	自然石		54×37	(正) 力淨心也 □七月廿九日
30	万靈塔	山型角柱	延享1 (一七四四)	179×94	(正) 三界萬靈 (右) 延享元甲子九月廿三日 (左) 堂六・四世穩代 (台座正) 願主 念故
31	追善供養塔	櫛型	寛保3 (一七四三)	94×46	(正) 有縁無縁之聖靈 追善 寛保三癸亥年 今月今日敬白
32-1	寺院標石	角柱	昭和40 (一九六五)	203×130	(正) 浄土宗 仙年寺 (右) 葛山城跡 (左) 光明名号摸化十方 当山六世諦響光信 後見光譽大承 (背) 昭和四十年五月建之 贈葛山豊吉 長泉町下土狩字西 石工西家恒次郎
32-2	如意輪観音	舟型座像		99×49	(中央部割れ目)
32-3	聖観音	丸彫座像		74×48	(頸部補修)
32-4	順礼供養塔(横堂)	丸彫座像	宝永4 (一七〇七)	65×37	(台座正) 横堂卅三所 奉供養観世音順礼同行 二十八人已上 宝永四丁亥年 八月廿九日 敬白 (頭部丸石補修/聖観音)
32-5	(石造物(不明))			47×44	(残存 宝篋印塔基礎部)
32-6	聖観音	丸彫座像		78×50	

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
32-14	順礼供養塔(西)	丸彫座像	寛保1(一七四一)	114×41	(正)奉供養 西國三十三所順礼 (右)寛保元歲辛酉七月十五日 (左)同行四人 半田七郎兵衛 内儀 坂田平十郎 内儀 勝間田八郎右衛門 (頭部欠落/如意輪)
32-13	順礼供養塔 (坂・秩・横・地藏)	山型角柱	明和2(一七六五)	133×53	別記19(260頁)
32-12	馬頭観音	櫛型		73×40	(正)馬頭観世音 願口 庄衛門
32-11	庚申塔	笠付角柱		120×47	(正)奉納庚申前 志ノ主 半田氏 (宝珠一部欠落)
32-10	順礼供養塔(横堂)	角型	宝永8(一七一二)	90×39	別記18(260頁) (塔身上下別・上笠部別)
32-9	供養塔	角 笠唐破風柱	貞享5(一六八八)	138×47	別記17(260頁)
32-8	順礼供養塔(西)	山型角柱	元禄5(一六九二)	67×50	別記16(260頁) (山型上部欠落)
32-7	順礼・順拜供養塔 (秩・坂・西・四)	櫛型	天明3(一七八三)	79×60	(正)奉納百八拾八番蓋佛供養塔 (右)施者勝間田氏 傳右門 (左)天明三癸卯四月八日 敬白仰達

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文	(備考)
36 3	宝篋印塔・ 五輪塔混合			92 × 31	(塔身正) 不 (右) 象 (左) 不 (背) 不 (残存) 宝篋印塔塔身 五輪塔空輪欠落	
36 2	宝篋印塔・ 五輪塔混合			70 × 41	(残存) 宝篋印塔相輪 五輪塔火輪・水輪・地輪部 風化	
36 1	馬頭観音	舟型立像		79 × 42		
35	宝篋印塔・ 五輪塔混合			79 × 30		(塔身欠落)
34	馬頭観音	舟型立像		67 × 33		(風化)
33 3	道祖神(双体)	笠 くり 型 抜		84 × 57		(一部欠落・頭部風化)
33 2	石造物(不明)	自然石		32 × 22		
33 1	道祖神(单体)	浮彫立像		45 × 38	(正) 口月吉日 中村中	(上下部欠落)
32 15	順礼供養塔(横)	丸彫座像	寛延1 (二七四八)	98 × 40	別記20 (260頁)	(頭部欠落/如意輪)

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
37	馬頭観音	舟型立像	明治29 (一八九六)	66×41	(正) 馬頭観世音菩薩 明治廿九年 四月口六回 葛山 市川藤作
38	宝篋印塔			98×59	(塔身正) 平 (右) 窓 (左) 窓 (背) 扉 (基礎右) 窓 (相輪部倒壊)
39	聖観音	舟型立像		77×40	(正) 證口口 三界 製造所 伊蔵 (中央部割れ目・舟型上部欠落)
40-1	馬頭観音	自然石	大正10 (一九二二)	56×45	(正) 馬頭観世音 大正十年七月 施主勝又源作
40-2	道祖神 (双体)	舟型立像	明和3 (一七六六)	57×43	(正) 明和三丙年 戌七月吉日 (上部欠落・風化)
40-3	道祖神 (双体)	くり抜立像		51×29	
40-4	庚申塔	山型角柱 くり抜	天保6 (一八三五)	114×86	(右) 天保六年 二月吉日 (左) 勝間田定七 同重助 坂田藤七 同半左衛門 塩崎伊右衛門 坂田平左衛門 同佐左衛門 (三猿くり抜)
40-5	幟立		昭和59 (一九八四)	176×37	(正) 奉納 八幡宮 (背) 昭和五十九年一月一日 當村氏子中 本村総代坂田英男 施工者 葛山産業有限 勝又島芳
40-6	鳥居	明神型	宝曆8 (一七五八)		(柱部) 宝曆八戊寅大 初夏吉 (倒壊) 笠木・鳥木・木鼻・柱部・龜服一対

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
46 1	馬頭観音	櫛型	明治16 (一八八三)	45×25	(正) 馬頭観世音菩薩 明治十六年 四月廿八日 功德主 勝又萬吉
45	馬頭観音	自然石	大正9 (一九二〇)	86×72	(正) 南無妙法蓮華經馬頭観世音菩薩 大正九年五月再建 坂田常吉
44	馬頭観音	浮彫立像		56×27	(正) 村中 (右) 世話人 徳右衛門 (光背上部欠落・風化)
43	馬頭観音	自然石	大正13 (一九二四)	54×36	(正) 馬頭観世音菩薩 大正十三年 四月吉日建之 藤井兼吉
42 2	水神塔 (石祠)	祠		49×49	(笠一部欠落)
42 1	馬頭観音	舟型立像	文政13 (一八三〇)	79×37	(正) 文政十三寅天 七月十有日
41	宝篋印塔・ 五輪塔混合		康応1 (一三八九)	61×23	(上段基礎正) 逆修 禪□ □ □ □ □ (下段基礎正) 妙祥 禪門 康應元年八月五日 (残存 宝篋印塔塔身部 五輪塔空輪・風輪・水輪部)
40 7	宝篋印塔 (部分)			18×24	(残存 笠部)

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
50 5	地藏菩薩 (六地藏)	丸彫立像		110 × 50	(頭部丸石補修)
50 4	閻魔	丸彫座像	宝曆14 (一七六四)	116 × 71	(台座正) 講結連中 五拾四人 金百疋 甚四良内 (背) 宝曆十四 甲申七月日關答
50 3	地藏菩薩 (六地藏)	丸彫立像		103 × 42	
50 2	地藏菩薩 (六地藏)	丸彫立像		105 × 46	
50 1	地藏菩薩 (六地藏)	丸彫立像		72 × 24	(頭部丸石補修・風化)
49	諸神 (雷神宮)	祠	寛延1 (一七四八)	56 × 46	(笠正) 雷神宮 (右) 寛延元年 辰八月吉日 (正補) 雷神宮 昭和五十四年七月吉日補修 (笠一部欠落) (左) 駿東郡葛山
48	道祖神 (単体)	浮彫立像		84 × 118	(光背部欠落・風化)
47	宝篋印塔 (部分)			17 × 17	(残存 笠部)
46 2	馬頭観音	舟形座像	大正8 (一九一九)	79 × 50	(正) 大正八年 三月四日 大津馬頭 (右) 勝又茂作 (左) 塩崎竹藏 塩崎茂作 三名立

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
50-14	万靈塔	自然石	延享5 (一七四八)	65×24	(正) 三界萬靈 (左) 延享五戊年 眞養代
50-13	聖觀音	丸彫立像		66×21	(台座止) 闍闍 (依京寺内)
50-12	如来	磨崖仏		103×183	(依京寺内)
50-11	聖觀音	祠		87×54	(左右側面文字あり/依京寺内)
50-10	十六羅漢	丸彫座像		41×26	(頭部欠落)
50-9	手洗石	鉢型		29×51	
50-8	万靈塔	丸彫座像	宝曆5 (一七五五)	154×66	別記21 (261頁) (聖觀音)
50-7	地藏菩薩 (六地藏)			40×37	(残存 蓮華部・別石補修)
50-6	地藏菩薩 (六地藏)	丸彫立像		100×46	(頭部丸石補修・下部割れ目)

50 23	50 22	50 21	50 20	50 19	50 18	50 17	50 16	50 15	番号
十六羅漢	石祠	碑(開道架橋之記)	徳因名号塔	十六羅漢	十六羅漢	十六羅漢	十六羅漢	十六羅漢	種類
丸彫座像	祠	自然石	自然石	丸彫座像	丸彫座像	丸彫座像	丸彫座像	丸彫座像	形状
		明治27(一八九四)							造立年
60× 59	67× 53	93× 78	160× 86	40× 35	37× 34	39× 33	43× 39	43× 38	法量 (cm)
(一部欠損)	(風化)	別記22 (261頁)	(正)南無阿弥陀佛 徳因(花押)	(頭部欠落)	(頭部欠落)	(頭部欠落・風化)	(一部欠損)	(一部欠損)	銘文 (備考)

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文	(備考)
50-24	碑 (景ヶ島の 景勝地記念)	自然石		162 × 58	別記23 (261頁)	
50-25	霊場標石	山型角柱	宝曆5 (一七五五)	75 × 47	別記24 (261頁)	
50-26	地藏菩薩	舟型座像	享保18 (一七三三)	62 × 34	(正) 誠誓恩大徳地藏坊 享保十八癸巳六月廿六日	(一部欠損)
50-27	地藏菩薩	丸彫立像		102 × 43		

別記1 順礼供養塔 (秩・西・横)

(正) 奉供粮 秩父三十四所 西國三十三處 横道三十三所

(右) 秩父同行五名 中村治兵衛 勝間田八郎右衛門

芹沢清八郎 同茂八郎 同源三郎

西国同行三人 勝間田幸七 同名喜右衛門 同圍七

(左) 横道同行十人 芹沢勝左衛門母 同名清助母

芹沢新六母 同名政三郎母 中村治兵衛

同文左衛門 同誠信 勝間田仙八母 同おさん

中野永右衛門母

(背) 宝曆八寅天 八月彼岸日

別記2 庚申塔

(正) 天下和順日月清明 風雨以時災厲不起

国豊民安兵才無用

(右) 駿州葛山村庚申塔供養都合十八人

寛文十二壬子天 十二月十九日 願主 敬白

(左) 奉造立庚申石塔爲二世安樂也

(背) 周法泉横盪普利

別記3 庚申塔

(正) ○ ○ 南無阿弥陀佛

日明益金剛宝塔者身往 本妙心

悲果園也衆甘會願主籙 庚申一座一切現當

(右) 二世回益建立一縁□塔成就 □門満也供養修行者也

衆益明者往□□所以者何待 □□是□上□人俱□□

矣

(左) □□ 天下和順日月清明風雨以時

災厲不起國豊民安無用 施主拾三人 敬白

(背) 千時享保六丑年八月日

別記4 碑(田場澤川防災工事竣工記念)

(正) 田場澤川防災工事竣工記念碑 昭和四十二年三月吉日

元建設大臣 衆議院議員 遠藤三郎書

(背) 田場沢川防災工事由来記

田場沢川ハモト灌漑用水雜用水トシテ有用ナ河川デア
ツタガ第二次世界大戦ニヨル国土ノ荒廢ト度々ノ台風
ノ襲来トニヨツテ毎年洪水ヲ越シテ氾濫シ爲ニ道路ノ
交通ハ杜絶シ流域ノ住家ハ床下床上ノ浸水ヲ見ル等將
ニ狂暴ノ河川ト化シ多年ニ亘リ住民心痛ノ種デアッタ
然シナガラ河川ノ改修ハ部落民一同ノ力デハ如何トモ
シ難イ大工事デアッタソコデ住民相謀リ町当局ヲ始メ
関係官庁ニ河川改修工事ノ申請陳情ヲ行ナウト共ニ前
建設大臣遠藤三郎先生及ビ県會議長岩崎龜先生並ビニ
裾野町長小林秀也先生ニ御骨折リ願イ国ノ砂防地域ト
シテ指定ヲ受ケ県土木部沼津土木事務所ノ設計監督ニ
ヨリ防災工事ヲ施行スル運ビトナツタ時ニ昭和三十六
年十月ノ事デアアル 爾来昭和四十二年三月工事竣工ニ
至ルマデ実ニ六年有余ニ亘リ町県国ノ関係当局ノ絶大

ナ支援並ビニ歴代区长防災工事推進委員田場沢最寄一
同ノ努力ト協力ニヨリ工事ハ継続ノ二順調ニ進行シ
ノ完成ヲ見ルニ至ツタ総事業費五、二五二万九千円内
工事費四、七六九万七千円用地費四八三万二千円堰堤
三基平松中川組流路工延長七八二米七七橋梁七床固工
六帯工三深良渡辺土建等ノ大工事ガ無事完了シ部落民
多年ノ懸案ガ解決シテ安眠シ得ルニ至ツタ事ハ下記各
位ノ御尽力ノ賜デアツテ田場沢部落民一同ノ深く感謝
スル処デアアル茲ニ田場沢川防災工事竣工ノ由来ヲ述ベ
長ク記念トシテ其ノ名ヲ留メントスル

芹澤茂一撰文 土屋高雲書

田場沢防災工事推進者 前建設大臣衆議院遠藤三郎

前静岡県知事齊藤壽夫 静岡県知事竹山祐一郎

前静岡県議會議長岩崎龜 裾野町長小林秀也

河川課砂防係長後藤保之

沼津土木事務所裾野支所長中村康男

前裾野町議會議長市野昇 裾野町議會議長湯山芳太郎

裾野町議會議員中村孝一 裾野町議會議員塩崎正雄

裾野町土木課長勝又利男

葛山區長(自昭和三十六年至昭和四十二年)御宿綱雄

中野兵作 勝又茂雄 坂田実 勝又好雄 中野富士一

勝又好一 防災工事推進委員 委員長中野里美

委員中野鶴吉 中村孝一 中野富士一 中村重雄

中野功 瀬戸信治 中村岩雄 大石厚 大石隆男

中村秀雄 中村晃久 中村三郎 中村久 中村慶次郎

中村久雄 中村定雄 勝又治孝 勝又文作 勝又実
勝又喬 臼井裕 芹澤哲哉 勝又操 芹澤富作
芹澤知春 芹澤正 芹澤正則 芹澤一榮 中野義之
中野佐重 中村真弓 芹澤セツ子 芹澤茂一
芹澤正巳 芹澤猛 大石俊男 芹澤秋義 大石定雄
石工 杉村新太郎刺

別記5 馬頭観音

(正) 大塚 馬頭観世音 大正八年三月

(上段台座右) 静岡県駿東郡富岡村葛山

施主遠藤音吉六十五才

(上段台座正) 今久ま五十九才 今やゑ三十一才

全文吉郎二十七才 今とめ二十一才

全五作十九才 全昇十一才 全渡八才

全道榮四才

(上段台座右) 我入道濱向 行者後藤ます

(下段台座右) 葛山願主中野正平三十二才 家内一同

中野福次郎四十才 家内一同

(下段台座正) 佐々木岩吉六十才 家内一同

遠藤紋次郎四十五才 家内一同

(下段台座右) 深良村勝又留次郎七十才 家内一同

沼津米山孝廿八才 妻せ以廿五才

(下段台座右) 眞田伊三郎 家内一同 勝又種吉

眞田源一郎 妻まさ

別記6 碑(葛山浅間神社玉垣建設の記念)

(正) 天皇陛下御在位六十年奉祝記念事業として富士山南口

一幣司浅間神社境内玉垣建設の記

尊皇と愛国を揚げ毎日精進を重ねて居ります私共は常に御即位六十年の重みを大切に考へ何を意味するかを一人でも多くの人々に語り熟知して戴けなければならぬと思います 当浅間神社氏子一同は冠頭に記した第一二四代今上天皇陛下御即位より本年満六十年間歴代天皇に比し稀代の在位であります 故に比の佳き年に当り陛下に対し心からなる御慶を捧げ以つて奉祝事業の一つとして氏子一同協賛し左記事業費の通り玉垣と併せて手水舎を建設し氏神様の神恩と御恵みに應え奉らむとす。

昭和六十一丙寅年卯月三日

官司伊藤政秋 称宜伊藤政進

記 建設事業費総額 八百参拾壹万八百六拾八円也

内訳 玉垣工事費五百五拾七万円

手水舎建築費六拾万円 樹木移植費参拾万円

附帯工事費八拾七万円 諸経費九拾七万八百六拾八円

建設事業費財源

市道拡幅補償金百参拾貳万八百六拾八円

氏子寄附金六百七拾七万円 諸收入貳拾貳万円

葛山浅間神社玉垣建設委員会 委員長勝又文雄

副委員長臼井裕 木村武雄 相談役伊藤政秋

監事勝又常一 永田朝男 会計事務勝又一

特別委員市川泉 勝又利男 勝又昌芳 新堀清

芹澤伊作 委員勝又義和 坂田文雄 坂田英男

岡村廣一 瀬戸太巳 奥田英夫 岩佐重雄 森甚人

井上博 奥田駿 勝又義勝 遠藤時中 中野鶴吉

芹沢正巳 芹沢友治 中野新一 連絡員勝又修

富士市厚原八一五 桜井石材店

別記7 碑(葛山浅間神社拜殿屋根一部改修増築の記)

(正) 天皇陛下御踐祚記念事業として富士山南口一幣司葛山

浅間神社拜殿屋根葺替一部改修増築の記

新帝陛下踐祚あらせられ、大御世の御名を平成とお定めになり改元せらる、茲に於いて当浅間神社氏子一同記念奉賛事業として七十有余年の歳月を経て老朽雨漏れし諸個所の腐食が目立ち台風雨のため倒木に依り棟の一部を破損せしにより、拜殿屋根瓦葺を銅板葺に改め天井、床、正面を改修し、神饌調理所、祭具収納所と拜殿前に向拜殿を増築し、以つて陛下と国体の護持、氏子の繁栄を祈念し、氏神様の神恩、御加護を授けられますよう乞祈奉らむと、氏子一同浄財により本事業を完遂し奉りしなり。

平成五癸酉年卯月吉日

宮司伊藤政秋 禰宜伊藤政進 権禰宜伊藤政嗣

一、建設事業費財源総額二六、一一〇、〇〇〇円

葛山氏子寄付金三一四戸二五、九一〇、〇〇〇円

東急電鉄株式会社二〇〇、〇〇〇円

一、建設事業費総額二六、一一〇、〇〇〇円

内訳(一) 拜殿屋根銅板葺及び向拜殿等増築工事費

二三、〇〇〇、〇〇〇円

工事請負者葛山九四〇 大石建築大石俊雄

基礎工事公文名 渡辺土建渡辺覚義

屋根工事佐野一四九二ノ七 溝口板金店溝口建次

(二) 記念碑建立費一、二五〇、〇〇〇円

寄付者芳名費三五〇、〇〇〇円

本殿御扉金具一式三五〇、〇〇〇円

落成式及び雑支出金五九〇、〇〇〇円

(三) 玉垣特別会計繰入金五七〇、〇〇〇円

(四) 記念碑台石寄贈者 下条区長勝又重博様

着手平成四年十月四日 完成平成五年三月三十一日

一、一幣司葛山浅間神社拜殿屋根葺替建設委員会

委員長勝又文雄 副委員長勝又重博 勝又五郎

監事塩崎金吾 中村秀男 会計真田巳春

特別委員御宿昌彦 白井裕 芹沢正巳 遠藤時中

岩佐勲 勝又尚徳 勝又常一 芹沢伊作

委員高沼国二 真田好雄 芹沢勝太郎 中野新一

若林敏 瀬戸重利 御宿正安 渡辺秀雄 中野明

荻田富雄 荻田哲弥

施工者富士市桜井石材工業

別記8 碑(葛山淺間神社玉垣記念事業芳名)

(正) 葛山淺間神社玉垣建設事業寄附者芳名(敬称省略)

手水舎建設費各三拾萬円 田場澤中野鶴吉

田場澤中野里美

手水舎石及記念碑基礎石 下条葛山産業(株)勝又昌芳

参萬円上城区一組勝又榮 市川博 大川守幸

御宿近倫 外川勝美 大川正幸 西川定明

二組塩崎賢治 木村豊治 荻田能文 勝又壯治

勝又義和 坂田文雄 塩崎敏郎 塩崎亨一

三組坂田政一 荻田富雄 坂田照夫 坂田英男

(株)フジプラ精工塩崎孝太郎 四組勝又一雄 西川久男

西川徳信 勝又一 安功 市川雅美 勝又賢一

勝又守 市川芳郎 市川静夫 勝又廣 勝又利雄

中村区一組半田守 瀬戸太巳 半田文男 御宿昌彦

勝又利裕 二組岡村廣一 坂田幸策 勝又作雄

勝又明 勝又偉泰 三組木村武雄 荻田人見 半田隼

四組入山光信 下条区一組瀬戸満 二組勝又昌芳

岡村高雄 杉本信吾 三組勝又常一 荻田房雄

四組岩佐真良 岩佐重雄 荻田幸一郎 岩佐勲

森甚人 中里区一組高田孝作 二組勝又幸三

勝又義勝 眞田巳春 中村康宏 高田林平 永田朝男

橋本文夫 三組勝又尚徳 奥田駿 新堀清

四組阿保正夫 勝又昌臣 鈴木昭一 五組小林照夫

柏木喜作 柏木一 眞田照正 眞田知治 眞田重吉

三尋木俊英 和出健司 眞田益雄 勝又東平

渡辺秀雄 六組伊藤政嗣 中野茂 遠藤時中

中野光喜 河内甫 七組遠藤法

田場澤区一組芹澤正巳 芹澤勝太郎 芹澤伊作

中村真弓 勝又青一 二組臼井裕 芹澤正則

芹澤友治 三組中村栄太郎 中村保雄 四組大石省吾

中村晃久 中村秀男 中村岩雄 中野葛 中野功

中野好久 壹萬五千円上城区一組大川秀次 古澤孝光

村松清 関野伊三夫 高田健至 三組滝口義文

坂田正雄 坂田政明 塩崎勲 塩崎清正 坂田健吾

四組植田智 勝又章信 五組田中比呂志 塩崎勉

澁谷昇 大森恒男 大河内正昭 高橋恒雄 斉藤立己

小野忠雄 中村区一組河西敏幸 瀬戸重利 瀬戸清

岡村治夫 瀬戸敬市 岡村忠雄 杉山喜信 半田進

兼井登 芹澤静夫 二組勝又皎 勝又一 塩崎利雄

安敏治 三組野村隼男 押野寅雄 塚田勇 菊地昌志

小見山博文 若林敏 杉山武士 望月周市 岡村君代

四組奥田英夫 荻田哲彌 荻田三郎 高橋直治

眞田佳三男 小山金作 蒲谷知己 宇留野舜

渡辺正一 松村希一 安永雅行 下条区一組杉山孝雄

荻田章雄 勝又清雄 勝又重博 藤本泰治 荻田憲雄

井上浩司 井上博 名東博美 佐藤正治 勝又一男

川口清 高沼國二 二組井上敏治 荻田鶴吉

佐野吉弘 井上恭男 兼井良平 三組御宿正安

岩佐勝美 岡村好雄 荻田泉 勝又義則 四組河内皎

勝又登 粉川博臣 森山成雄 瀬戸啓司 村石貞雄

岩崎陸男 中里区一組荻田一政 菅原富夫 武山信昭

芹澤伸吉 中野好晃 茂野芳久 杉山保 渡辺昭

二組矢部徳次 荻野由美子 渡辺洋一 菅野征勝

御宿幸也 大塩捷利 江坂克己 安武日佐男

秋本輝夫 勝又勝吉 三組勝又巖 渡邊正實

眞田良彌 眞田好雄 深川貞明 眞田幸雄 奥田義信

勝又博 今川尊貴治 柴田榮 四組勝又武久

小林勝己 小山政美 藤島紘一 佐藤房男 日吉隆夫

渡邊徳信 海老原正文 勝又和男 黒木敏也

田代芳雄 六組鈴木重男 中野喜行 勝又直之

土屋光雄 中野旭 佐々木光春 佐々木はな

中野南海男 林伴治 七組勝又彦作 勝又孝徳

西川金作 本間光則 森章恵 杉山勇 一ノ木戸英雄

小田二三雄 村瀬靖夫 加藤茂樹 山形敢 勝又啓市

根上浩久 八組勝又整吾 伊藤正雄 勝又好吉

長田幸男 首藤俊彦 岡崎英博 村野義雄 増田薫

田場澤区一組大石定雄 勝又岩雄 大石俊雄

芹澤茂明 中村誠男 芹澤セツ子 中野明 芹澤邦彦

中村郁江 芹澤保 芹澤利光 芹澤治男 小宮山正儀

中村義久 二組芹澤哲哉 勝又庄市 芹澤恒男

芹澤宏誌 三組中村三平 中村保彦 中村久

中村三郎 勝又喬 勝又實 勝又郁雄 中野新一

勝又治孝 四組瀬戸信治 五組中村優 芹澤さだ子

長谷川博 長島正夫 芹澤學 大石賢一 塩津靖男

中村健保 上川畑健治郎 大石俊一

別記9 庚申塔

(右) ○ 南無阿弥陀佛

日圓 金剛石塔 固本 國滅之悲 三身同然

爲二世兩益建立一本四面石塔供養願者也

兵衛 次左門 荻田庄

勝亦 与 中村 左門

勝亦 兵 勝亦

(背) ○ 法本曰 衆生開五仰應當 願主 國所以

者何与如是諸上善人俱一處 勝又因

荻田 荻田 大善 田源四

上

(正) 修多羅曰 佛所遊履國 丘聚靡不藪化天下

和順日月清明風雨以時災厲不起國豐民安 已止

塩崎 荻田 荻田 坂田五良

坂田定兵衛 坂田五左門 坂田四良兵

(左) 干時 元禄六癸酉天 法施 信心結衆貳拾

無射下天

別記10 碑(宮川橋記念)

(正) 宮川橋記念碑

本橋、富岡村大字葛山區民現在戸數百五拾戸ノ協議決

定シ監督官廳ノ許可ヲ得最新式鉄筋混凝土ヲ以テ橋長

拾間三尺巾拾四尺五寸其材料ハ軟鋼鉄筋貳千八拾三貫

余混凝土貳千四百五拾三切余石垣三拾壹坪余此工費総

額金六千七百五拾圓余内金六百圓富岡村補助内金三百六拾五圓有志者の寄付其也ハ葛山區民負担シ大正十三年九月工事ニ着手今年十一月落成セリ本橋ハ永久的完全ナルヲ目的トシ駿東郡技手岩柳庸夫氏ニ設計及ヒ監督ヲ囑託シ本郡原町小野徳治郎ノ請負ニテ工事完了セリ有志者ノ寄付金額芳名及ヒ発記人總代等ノ氏名ハ裏面ニ記載シ將來ノ記念トス

(背)

金七拾円也北郷村棚頭小野幸太郎

高根村山尻瀧口源太郎

金五拾円也小泉村石脇鳥沢由太郎

金五拾円也全村佐野鈴木榮太郎

金三拾円也沼津市愛鷹山組合役場

金貳拾円也神奈川県鎌倉郡瀬谷村瀬谷小島量為會社

金貳拾円也富岡村千福西嶋恒三郎

金拾五円也小泉村佐野持田與之助

金拾円泉村平松飯塚圭次郎

金拾円富岡村上ヶ田勝又源吉

金拾円全村御宿久保文作 金拾円全村全所勝又常治

金拾円富岡村御宿中川豊 金拾円全村全所湯山順作

金五円全村全所勝又清太郎

金五円富岡村御宿渡邊淳作 金五円全村全所植松亮作

金五円全村上ヶ田八木省吾

金五円全村全所荻野新一郎

金五円小泉村石脇杉山久作 金五円全村全所真田為吉

金五円全村全所真田富太郎

別記11 碑(記念碑誌)

(正)

葛山區発起人總代 筆者芹澤孝三 岩佐茂市
區長市川富士作 御宿迨吉 勝又茂作 岩佐英雄
遠藤儀市郎 架橋委員荻田和作 勝又善次郎
半田治三郎 岡村半四郎 大川為作 塩崎治作
塩崎茂作 坂田文作 市川武好 岡村榮太郎
荻田彦次郎 岩佐十作 芹沢桂次郎 勝又庄作
中村長吉 勝又孫藏 中村幾太郎 勝又半吉
真田重太郎 渡邊喜十郎 遠藤紋次郎
現區長勝又政市
昭和三年六月建設 石工細谷浪藏

記念碑誌 宮川橋は大正十三年に葛山区民一同の努力によつて架設されたものでありますが、五十五年の歳月を経過した現在老朽化と自動車の大形化により架替をしなければ、危険な状態となつてしまつた。そこで葛山区昭和五十四年一月大区初集會に於て宮川橋の架替及び東名高速道路「ボックス」内雨水を佐野川へ排水する工事の促進方を裾野市長市川武に陳情するよう満場一致で可決されたので葛山区本村總代を中心に運動を展開し昭和五十四年度裾野市の予算に金四七、二一〇千円が計上され昭和五十五年五月竣工式を舉行し本村の全員が參列した。

一、橋梁延長二十二米一〇 全幅員七米一六
車道五米 歩道一米五〇 工事費三四、八〇〇千円

請負業者下部工 山久建設株式会社

上部工 日本鋼管株式会社

一、排水路工事延長百二十米 工事費八、〇五〇千円
請負業者山久建設株式会社

一、工事中の迂回路、仮橋工事

工事費四、三六〇千円 請負業者山久建設株式会社

土地提供者御宿湯山匡秀殿 平松中川豊彦殿

下条勝又一男殿 勝又五郎殿 勝又重博殿

寄附者一、金五拾萬円也東急電鉄株式会社殿

一、金五拾萬円也東急建設株式会社殿

一、金貳拾萬円也山久建設株式会社殿

一、金拾萬円也小島孝徠殿

一、金五萬円也日本銅管株式会社殿

一、金參拾萬円也宮川橋建設促進委員一同(裏面)

右工事費の内三〇、〇〇〇千円は、東富士演習場民生安定整備事業として防衛庁より、補助金を受けている。

この工事に関係する土地協力者関係役員名は別記し後世に伝へる

昭和五十五年八月吉日建立

(背) 宮川橋建設促進委員会役員 委員長岩佐重雄

副委員長木村武雄 市川甲子良 顧問勝又一男

勝又利男 勝又文雄 中村真弓 奥田駿

委員荻田房雄 岡村治夫 坂田照夫 芹沢正

井上三昭 小見山博文 坂田政一 勝又義勝 井上博

半田隼 大川守幸 森甚人 芹沢静夫 西川定明

市川泉 荻田泉 御宿昌彦 勝又常一 小見山博文

木村豊治 勝又重博 望月周市 勝又義和

昭和五十四年度本村総代 昭和五十三年度本村総代

昭和五十五年度本村総代 元協議員

市會議員総務委員長 市企画調整部長

市會議員經濟委員長

昭和五十三年度葛山大区長(中里区長) 下条区長

中村区長 上城区長

昭和五十四年度葛山大区長(田場沢区長) 下条区長

中村区長 上城区長 中里区長 下条協議員

中村協議員 上城協議員 下条道路係 中村道路係

上城道路係

昭和五十五年度葛山大区長(上城区長) 下条区長

中村区長 下条協議員 中村協議員 上城協議員

下条道路係 中村道路係 上城道路係

石工 富士市厚原桜井石材店

別記12 碑(道路記念)

(正) 道路記念 維時經濟機構大變動政府爲農村匡救土木事

業施行偶自宮川橋至中尾路線指定昭和七年十二月擧起

工式翌年三月竣工延長三千九百餘米石積工五百二十面

坪砂利百九十餘立坪人夫凡五千人總工費九千圓設計至

城跡線有堀曲相謀改直線非常時及道路開修爲記念建之

寄附者芳名 一金參拾萬円也小野幸太郎殿

滝口源太郎殿 一金拾五萬円也湯山芳香殿

別記13 碑(道路記念)

- (正) 記念碑 最近の交通量の増加は勿論特に大型車輛の通過も著しく本村区民の永年の宿願である葛山本村宮川線(市道一一一九号線)の拡巾改良事業が裾野市当局の深いご理解は基より関係地主の犠牲と且つ献身的なご協力を賜り工事費その他用地補償費等を含め下条交
- (左)
- 葛山道路委員一同遠藤紋次郎 兼井林平 勝又久吉
 - 勝又儀作 塩寄茂作 坂田峯松 高橋芳藏
 - 坂田元三郎 岡村倉次郎 井上半次郎 勝又幸次郎
 - 瀬戸啓次郎 勝又芳翁 勝又榊平 岡村甚太郎
 - 勝又吉三郎 森房次郎 岡村半四郎 岩佐十作
 - 荻田柳作
 - 一金拾参円也湯山莊作殿 一金拾円也牧野駿藏殿
 - 一金五円也西島恒三郎殿 一金五円也久保文作殿
 - 一金五〇〇〇 一金五円也杉山愛國殿
 - 一金五円也芹澤清一郎殿 一金四円也杉本清太郎殿
 - 一金参円也池谷満殿 一金参円也真田為吉殿
 - 一金参円也渡邊淳作殿 一金参円也中西一郎殿
 - 一金参円也鈴木榮太郎殿 〇〇也勝又正平殿
 - 一金貳円也渡邊與作殿 一金貳円也半田清殿
 - 一金壹円五拾銭勝又廣由殿 一金壹円也弓野政吉殿
 - 一金壹円也大庭とみ殿 一金壹円也臼井義行殿
 - 一金壹円也杉山貞次郎殿 一金壹円也望月良作殿

別記14 石灯籠

- (正) 奉寄進西國 卅所順礼 正徳癸巳天 七月十五日仙年 寺 要誉代 勝間田重右衛門 坂田平重郎 鹽崎勘右衛門 半田七郎兵衛 中村傳重郎 勝間田甚右衛門 井上權右衛門 岩佐久右衛門
- (背) 記念碑施工 富士市厚原櫻井石材店
- 又点より宮川橋に至る延長二百十米の総事業費五千三百二十万円で(尙)勝一建設土木の卓越せる技術により施工され平成六年十二月竣工を見るに至りよつて本事業を後世の為その概要を記しここに記念碑を建立するものである。
- 平成七年三月吉日
- 葛山本村総代岡村好雄 葛山前本村総代半田隼
- 富岡地区区長会長上城区長勝又文雄
- 葛山下条顧問勝又重博 葛山中村顧問御宿昌彦
- 葛山上城顧問勝又義和 葛山下条区长佐藤正治
- 葛山中村区长杉山秀親 葛山現本村総代坂田文雄
- 葛山現顧問森甚人 葛山前下条区长御宿正安
- 葛山下条副区长長勝又登 葛山中村副区长長勝又皎
- 葛山上城副区长市川静夫
- 葛山下条道路係兼事務長岩佐秀美
- 葛山中村道路係坂田広一 葛山上城道路係勝又壮治
- 記念碑建立所有者下条共有地

(宝珠) 丸

別記15 地藏菩薩

(背) 石工 信州高遠 池上市良兵衛作

(台座) 願主 念故 施主 半田勝右門母 坂田平十郎内

真田善九良 勝間田庄兵衛父覚譽順正信士

勝間田平八郎 勝間田傳右門母善室秋散信女

延享元甲子 七月廿四日

別記16 順礼供養塔(西)

(正) 經曰 奉供艱西國卅三所

(右) 經曰 举身光中五道衆生 一切色相皆於中現

(左) 干時 元禄五申天 七月十五日 荻田彈右衛門

遠藤九右衛門 中村新左衛門 岩佐彦右衛門

別記17 供養塔

(正) 法本曰 举身光中五道衆生

一切色相皆於中現

(左) 會 具一切功德慈眼視衆生

福聚海無量是故応順礼

(右) 會 觀音妙智力能救世間苦

具足神通力廣勝智方

(背) 雲上火座利益平均 貞享五戊辰年 月十八日

信心施主 一道廿拾八

別記18 順礼供養塔(横堂)

(上段正) 奉供養觀音菩薩順礼 横堂卅三所 同行十四人

(上段左) 寶永八辛卯年 二月十八日

(上段右) 施主敬白

(下段正) 奉供養横堂三十三所

(下段右) 上ヶ田村助治郎室 御宿村甚四郎 平治郎 同室

善九郎 清右衛門 善左衛門 當村甚右衛門

(下段左) 當村勝右衛門母 同閑 赤左衛門娘清 大善院母

久左衛門室 与四三衛室 平十郎室 治郎衛門母

(下段背) 寛保三天 亥八月日

別記19 順礼供養塔(坂・秩・横・地藏)

(正) 觀世音順禮供艱塔

(右) 維持 明和二乙酉天六月吉日 敬白

(左) 經曰 具一切功德 慈眼視衆生

福聚海無量 是故應頂礼

(台座正) 同行 坂東 横道

塩埼治郎右衛門 勝マ田八郎兵衛門 坂田藤七郎

半田勝右衛門内 勝マ田赤左衛門母 仲村徳右衛門母

(台座右) 秩父 仲野水右衛門母 遠藤九右衛門母

杵本太兵衛内 地藏觀音横道

(台座左) 勝マ田赤右衛門母 仲野氏きく 仲村源六郎

荻田常八内 御宿村 中川利兵衛内

別記20 順礼供養塔(横)

(正) 奉供艱横道三十三所

(右) 同行十五人 半田平九郎 同同人内

勝間田傳右衛門母 秋本太兵衛内 真田善九郎内

勝間田喜右衛門内 遠藤久右衛門内

(左) 半田勝右衛門母 勝間田佐五右衛門 坂田藤七郎母

同同人内 仲村祖八母 荻田平右衛門

勝間田八郎右衛門 同惣右衛門

(背) 寛延元戊辰天 九月彼岸日

別記21 万靈塔

(正) 三界萬靈

(背) 宝曆五乙亥天四月十五日 日當山廿五主 到譽

右疱瘡死靈爲菩提立

(右) 遊誓 利春 義天 理竟 止竟 衍岳 速成 頂円

松吹 良説 枝香 梅円 箋還 朝致 常和 紅樹

演達 己上 童男

(左) 恵春 竟安 容含貞秀 覚應 易察 值縁 尔善

稚暁 好珠 花香 量幻 惠開 禪戒 己上 童女

別記22 碑(開道架橋之記)

(正) 開道架橋之記 景嶋山後橋發絶既久矣微殘其名興橋跡

耳而后立産者岩石突兀為窮困難也茲馬志者其々不忍觀

比困難而募同志者自東岸至本堂北方之道路□□而造石

階架木石二橋矣實可謂仁慈之事業也因刻氏名傳永世云

雨 干明治廿七年七月 方九居士謹誌

駿東郡富岡村御宿 發起人中川むま子

賛助員湯山半七郎 全郡深良村 全瓜生駒太郎

全郡富岡村御宿 世話人中川瀧治郎 全西川和七

全西川忠七 全西川武太郎 全勝又仁平 全小林寅吉

豆州君沢郡江間村 石工小澤福太郎

別記23 碑(景ヶ島の景勝地記念)

(正) 記念 當山ハ弘法大師諸國巡化ノ際缺ノ奇景ヲ愛セラ

レ天然ノ岩ニ觀世音菩薩ヲ彫刻ナサレタ由緒深キ所故

有志ト計リ葛山念佛講ノ盡カニヨリ十方有縁ノ御喜捨

ヲ仰ギ將來遊園地トナス第一歩トシテ清水橋ヲ改修シ

又堂宇ノ屋根替モ終了シタリ依テ毎年四月十七日觀世

音ノ祭典ヲ期シ御喜捨各位ノ子孫長久ヲ回願スルモノ

也 發起人葛山區長勝又政市 顧問芹澤孝三

委員岩佐英雄 勝又儀作 勝又辨藏 中村五平

遠藤儀市郎 高橋芳藏 勝又幸次郎 荻田彦次郎

中村長吉 遠藤紋次郎 寄附湯山一

別記24 靈場標石

(正) 二十九番 觀世音菩薩 景島山依京寺

(右) 西国 秩父 横道 供養塔

(左) 銘曰 俯圓橋續道絶情續人思矣肆當寺一橋及破壞通路

不自在參詣道俗男女愁之曰茲勸有心輩新修造□就諸人

通路令自在者也

(背) 維時寶曆五稔乙亥四月上八日

願主上羽新田郡女塚村栗原仁兵衛 當村勝間田長三郎

(台座正) 九右衛門母 國回妙成 赤左衛門内 藤七郎内

志施主等 直右衛門内 太良右衛門母 甚六右衛門
園右衛門母

(台座右) おさか 藤八母 平六母 平四郎 平右衛門

勘七 □ □ 仲右衛門 藤七 園母

(台座左) 新右衛門 □ 右衛門母 園左衛門母 清七母

長九郎内 源十郎 彦八母 茂兵衛母 清八郎

惣右衛門

裾野の石造物点描

葛山「地藏菩薩」(29-3)

本資料は、もと半田隼家（ぎんぎ）の敷地内にあった。しかし、いつと
ことは確定できないが、近代、それも戦前のある時点で知恩院末の
浄土宗寺院、仙年寺に移された。半田家は同寺参道の入口付近に位
置する。半田家の菩提寺であるが、本資料は墓所ではなく、三門
をくぐった左側に置かれている。蓮華座の上には絶えることなく硬
貨が積まれ、近隣の人々の信心を物語っている。

半田家ではもと同像のあった場所に祀石を置き、今日に到って
いる。



仙年寺「地蔵菩薩」
右手ななめ後方に半田家の墓所がある。

地藏菩薩は、釈迦入滅後、弥勒が下生するまでの無仏の時代、六
道の衆生を化導するという。近世の庶民にとって、もつとも馴染み
ある信仰対象の一つであった。基本的形態は、比丘形で、左手に宝
珠、右手に錫杖であるが、本資料もそれに則っている。

庶民の願望を含んだ俗信では、小児の成長を守護し、不幸にして
夭折した際にはその死後を救済すると信じられてきた。本資料は、
その観念の当地方における近世的展開の様相を今に伝えている。

蓮華座の部分に「施主」の人名が見える。同座は円形であるが、
前後左右に留意して記せば次のようになる。

(正面)

願主

念故

施主

半田勝右門母

(左側面)

坂田平十郎内

真田善九良

勝間田庄兵衛父

覺譽順正信士

勝間田平八郎

(右側面)

勝間田傳右門母

善室秋散信女

延享元 甲子

七月廿四日

「仙年寺過去帳」で確認すると、「覺譽順正信士」は「勝間田庄兵衛父」の戒名である。同様に、「善室秋散信女」と「勝間田傳右門母」は同一人ではないかと推定される。ともに逆修で生前に戒名を与えられていたということである。したがって、施主は全六人、男女三人づつであった。

さて造立の経緯についてであるが、前述のように元々半田家の敷地内に造立され、また、「半田勝右門母」と正面に単独で刻されていることなどからも、半田家が中心的役割を果たしたことはほぼ間違いない。とすれば半田家の家史についての理解が必要となってくる。しかし残念ながら同家の史料は散逸し、旧家であるとの認識は一致していたが、その具体的歴史についてはほとんど明らかにされていなかった。現在もその状況は基本的に変わらないが、今回の調査の過程で半田家個人の過去帳を見出すことができた。明治初年の記述がみられる点や、一部欠損がある点など、考慮しなければならない事項も多いが、同家の歴史を知る上で貴重な史料である。これに、「仙年寺過去帳」、半田家墓塔の記述などを加えて整理したのが、附載した年譜・系図である。

勝右衛門父、すなわち七郎兵衛は、延享元年（一七四四）七月十五日に没している。「地藏菩薩」に刻された日時の直前にあたる。施主に七郎兵衛の名がないのは、死去を承けてのことか、もともと勝右衛門母、すなわち七郎兵衛妻の主導によるものであったためか確認できない。しかし同女の深い思いが含蓄されていたことは確実である。

そこで「仙年寺過去帳」を見ると、寛保三年（一七四三）、すなわち造立年の前年に次のような記載がある。

華屋遊蓮童女 六月三日 勝右衛門娘

同内容の記述は、「半田家過去帳」によっても確認できる。童女としては立派な戒名と云えよう。勝右衛門母は、ほぼ一年前に孫娘を失っていたのである。造立を決意するまでにはさまざまな事由が交錯、沈澱していたことと思うが、直接の契機はこの事実にあったと思われる。勝右衛門母は明和五年（一七六八）十月二十四日に八十一歳で没している。とすれば、造立当時五十七歳頃であった。七月二十四日は地藏菩薩の祭日である。勝右衛門母は、亡くなった孫娘を悼み、ほぼ一年後のこの日に結縁させ、夭折の幼童を守護してくれると信じられていた地藏菩薩に後生を托し、造立したのである。

ところで、半田家の墓所は仙年寺境内にあり、現在十七の墓石が並んでいる。近年半田家では墓所を整備したため、配置は必ずしも昔日の通りではない。また、半田家現当主、隼氏の話によれば、墓石の新たな位置関係について、特別な配慮をしたわけではないという。が、職人のはからいか、まったくの偶然かは定かでないが、勝右衛門父母の墓のまさに正面に、孫娘の墓がある。また、勝右衛門父母の脇には勝右衛門夫妻のそれがある。

孫娘の墓には同女の戒名に並んで「澄蒼英還信士」とみえる。これは「半田家過去帳」によって勝右衛門の子、文次郎であり、二十歳で没したと確認できる。若くして他界した姉・弟が同じ墓塔の中に眠るのである。同墓には聖観音が彫られている（次頁写真参照）。半田家墓地の中で彫像のあるのはこれのみである。肉親の思いを留めている。

この時点において七郎兵衛夫妻はすでにこの世になく、勝右衛門

【半田家石造物関係年譜】

年号	西暦	月日	事 項
寛保3年	1743	6月13日	勝右衛門娘「華屋遊蓮童女」、没。
延享元年	1744	7月15日	勝右衛門父、七郎兵衛、没。
同 年	1744	7月24日	「地藏菩薩」造立。
延享4年	1747	2月24日	勝右衛門娘「梅顔香仁童女」、没。
宝暦5年	1755	2月4日	勝右衛門娘「好珠童女」、没。
同 年	1755	2月13日	勝右衛門娘「華香童女」、没。
宝暦13年	1763	6月26日	勝右衛門娘、ヲキワ、没。18歳。
明和5年	1768	10月24日	勝右衛門母、没。81歳。
明和8年	1771	6月8日	勝右衛門息、文次郎、没。20歳。
同 年	1771	10月19日	勝右衛門、没。62歳。
寛政2年	1790	3月10日	勝右衛門妻、ヲタツ、没。79歳。(石脇村より嫁す)

部分が欠損しており、同じく不明である。

ところで、この「地藏菩薩」の背面には、「石工 信州高遠 池上 市良兵衛 作」と銘されている。敢えて「作」と記し、施主らよりも大字であることから、作品に対する自負と、またそれを尊重する

夫妻が造立者である。造像による、せめてもの供養菩提という心性が、親子相承されたのである。ただ勝右衛門自身、文次郎の没後四ヵ月余で他界しており、あるいはこの子らの母であるヲタツの心情が、より直接的に投影されたのかもしれない。とすれば半田家の彫像は、いずれも女系の悲嘆と祈念の彩りが濃い。

なお、「半田家過去帳」の中にも、勝右衛門娘の俗名は記されず、勝右衛門母についてはその日付の

周囲の配慮が感じられる。すなわち作者は、当地方に優れた足跡を残し、高遠石工と呼称される人々の一人であった。高遠石工については、拙稿「裾野の石造物の周辺 信州高遠石工と民衆の心」(「裾野の石造物」上巻 一九九五 裾野市教育委員会市史編纂室 所収)に簡単な紹介がある。

池上市郎兵衛の作品は他に二点を確認できる。市内西島義禮家にある宝永七年(二七二〇)八月吉日の「順礼供養塔」(本巻 千福17-1)と、同じく市内西安寺にある寛延元年(一七四八)十月十五日の「祐天」名号塔(「裾野の石造物」上巻 深良II 46-2)である。石造物を介して、四十年近くにわたり当地方と関わりを持ったことが知られる。「地藏菩薩」は石工として円熟の域に達した時期の名品と云えよう。また、「祐天」名号塔には市郎兵衛の傍らに「同苗 伊門(伊右衛門カ)」と見え、血縁関係の有無は今のところ不明であるが、配下を有する者となっていたであろうことが推測される。



聖観音(半田勝右衛門娘墓)

ところで西安寺は、仙年寺と同様浄土宗であり、そうした宗派的関係の延長線上に「(祐天) 名号塔」も造立されたのかもしれない。

今は亡き肉親への思いを具現化したいという願望と、それを可能としてくれると信頼された職人の優れた術、その交叉に本資料は位置すると結論できる。

なお仙年寺には、天保七年(一八三六)正月十二日に亡くなった、旧高遠領荊口村出身の石工北原弥喜四郎の墓がある。定住していたか、客死かは不明であるが、葛山近隣に住居していたと思われる。

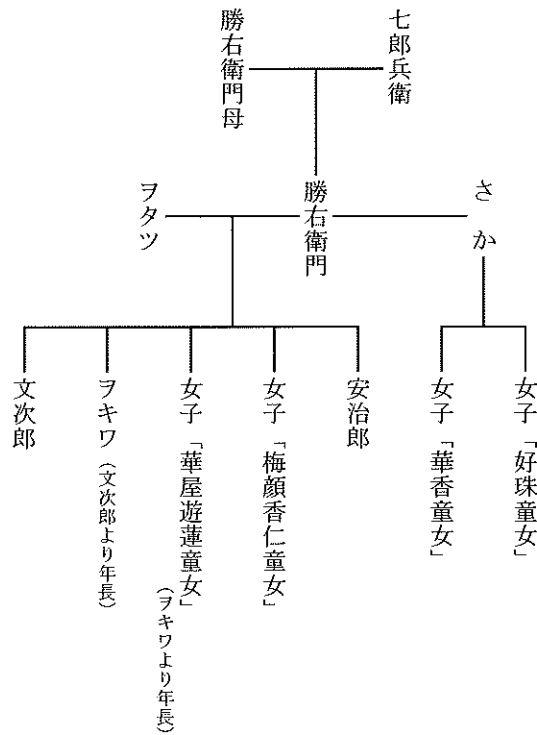
半田家と高遠石工の関係については、伝承として、自宅の一部を職人らの定宿として供していたとするものがある。史料的に実証できないのが惜しまれる。

半田家と仙年寺の関係について補足すれば、宝暦元年(一七五二)に七郎兵衛が大鑿を、寄進している。もっともこの時七郎兵衛はすでに没しており、おそらく息の勝右衛門が故人の名でそうしたのである。また安永六年(一七七七)五月吉日には、半田家が大檜二本を材料として施行し、欄間五枚(現存三枚)が寄進されている。さらに、文政六年(一八二三)八月十二日の本堂上棟にも、一族の医師源鱗が関与している。

「地藏菩薩」の他の施主五名と、半田家の関係については未だ詳らかでなく、今後の検討課題としている。

本稿作成に際し、半田家当主半田隼氏、仙年寺住職入山光信氏、元裾野市史編纂室調査委員石田義明氏にご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

【半田家系図】



《註記》勝右衛門の子どもは、これ以外にもいる可能性がある。兄弟姉妹の長幼については安治郎、「梅顔香仁童女」の位置が不明であり、便宜的にここに配した。ただし、名前からして安治郎の方が、文次郎より年長か。また、さかの娘二人は抱瘡で幼くして没している(本巻「葛山」「万霊塔」点描 二六七〜二六九頁 参照)。半田家歴代の中に、少なくとも勝右衛門は二人いる。もう一人は慶応元年(一八六五)八月二十日に没している。本稿で問題とした先代勝右衛門は、戒名からしても仙年寺と密接な関係にあったと思われる。

(伊 東 誠 司)

裾野の石造物点描

葛山「万霊塔」(50—8)

医療の進歩した今日、疱瘡はさほど心配される病気ではないが、近世においては死に直結する、最も恐怖すべき流行病であった。

本資料は、宝暦五年(一七五五)に市域を襲った疱瘡の凄まじさを今日に伝えている。刻まれた戒名を「仙年寺過去帳」によって照合したものが別表である。この内、遊誓童子のみは、宝暦四年(一七五四)であるが、それ以外は同五年一月十七日から三月二十二日迄、二カ月余の死去である。この過去帳に記された同年の全死者は四十四人であるが、この間のみで実に二十九人の子女が亡くなっているのである。当然、曾平、源助、さか、のように立て続けに複数の愛児を失う悲劇にも見舞われた。ちなみに、同三年(一七五三)の全物故者は三十一人、四年は三十五人、六年は十七人である。

こうした幼い命の菩提を弔うため、「日當山廿五主 到譽」が中心となり本資料を造立した。日当山は、市内葛山にある浄土宗寺院、仙年寺の山号である。また、同寺の歴任を記した過去帳には「第廿四世安蓮社穩譽上人岩察和尚 宝暦十一巳年七月上二日」、ならびに「第廿五世還蓮社到譽上人學善和尚 享和二戌年三月廿六日」とある。すなわち宝暦五年の段階で二十四世の穩譽は存命であった。しかし、宝暦四年十一月の仙年寺阿弥陀像等修理、台座新調は到譽によってなされている。穩譽は、すでに隠居していたと思われる。少

なくとも、宝暦五年七月十五日付の「本堂・鐘堂再興記念位牌」には「当寺廿五世現住 到譽学善上人」とあり、代替りがなされていたことは確実である。ただし「本堂願主」として穩譽上人の名も見え、前住に対する心づかいが感じられる。

到譽はその他様々な事跡を確認でき、仙年寺歴任の中で傑出している。その到譽が宝暦五年一月十七日の曾平の息の死に際し、過去帳に「疱瘡死ス」と註書きをし、また同年の死者を四十四人と纏めた後には「疱瘡厄」と書き残している。到譽の痛恨の思いが滲み、「万霊塔」造立に照応している。

さて、本資料の所在する依京寺は複雑に岩石が入り組んだ奇観の中に建つ。御厨地方における観音順礼の二十九番札所と定められ、本資料と同年年月の八日と記された「霊場標石」(本巻 葛山50—25)もある。庶民の信心を集めていたと思われる。しかし、仙年寺現住職のご教示によれば、特定の檀家は持たなかったとされる。また開



「万霊塔」と依京寺本堂

創時は真言宗であつたとされるが、近世には浄土宗に転じ、仙年寺の末寺となつていた。依京寺境内に仙年寺住職の造立になる石造物が存在するのはこうした背景による。

往來と本堂の間には小さな谷があり、架橋されている。その位置は、現在は本堂右後方であるが、かつては正面右前方付近にあつたと伝えられる。現在の橋の位置よりすれば、道順からしても本資料は看過されがちになる。しかし以前の位置よりすれば、まさに本堂正面の左脇に堂々と据えられていたことになる。それは本寺の權威を象徴するかのようでもある。

ところで、ここに留意すべき事実がある。宝曆四年末には前述の遊誓童子のあとに五人の兒童が亡くなつてゐる。にもかかわらず、それらについては碑面から除外され、翌年の一月十七日の利春童子となる。明らかに遊誓童子を優待している。遊誓童子の父親は、真田甚四郎である。甚四郎は一月二十日に娘も失つてゐる。

前掲の「本堂・鐘堂再興記念位牌」を見ると、真田家では甚四郎の父と比定される善九郎が、仙年寺鐘堂建立に経済的側面から中心的役割を果たしていることがわかる。すなわち真田家の人々は財力を有し、かつそれを施行しようとする菩提心をもつてゐた。

愛児を立て続けに失うという不幸が、甚四郎ないしは真田家に、本資料造立を促したのではなからうか。推測の域を出ないが、真田家もこの造立を経済的側面から強く支援したと思われる。遊誓童子への優待はこうした事情に関係があるのかもしれない。また、鐘堂建立への厚い賛助も、その意識の延長線上にあるのかもしれない。

なお、容含貞秀童女のみ、他よりも長い戒名となつてゐるが、父親の幸助は葛山村の名主ではないかと推定される。

このような若干の優遇や差異があつたかもしれないが、一月十七日から三月二十二日までの幼童の死者については一人も余さず記している。また、三月二十二日から造立月日として記された四月十五日までの間に、子どもの死者はない。すなわち、階層、経済力等にかかりなく、隔てなく刻している。

もし本資料に記された期日通りに造立されたとすれば、その決意から実現までは比較的短期間で、記名に関しては直前まで慎重な配慮がなされていたということであろうか。

記名の順について云えば、童男は忌日の通りで、前後している箇所はない。童女は稚暁、好珠、花香の配列に混乱がある。その意味については今後の課題としたいと考えてゐる。

到答という傑出した存在、真田家などの経済力、そしてなによりも、はかなく命を散らせた愛児への哀惜が一つの結晶となつて、今日に本資料を伝えることとなつた。疱瘡というなかば抗いがたい運命への悲嘆と、転生への祈念を留めてゐる。

なお、近隣の葛山下条には、瘡守稲荷がある。皮膚病の治癒に感応ある神格であるが、庶民意識の深層にあつた疱瘡に対する恐怖もどこかで通底してゐようか。

本稿作成に際し、仙年寺御住職入山光信氏にご助力いただきました。記して感謝の意を表します。

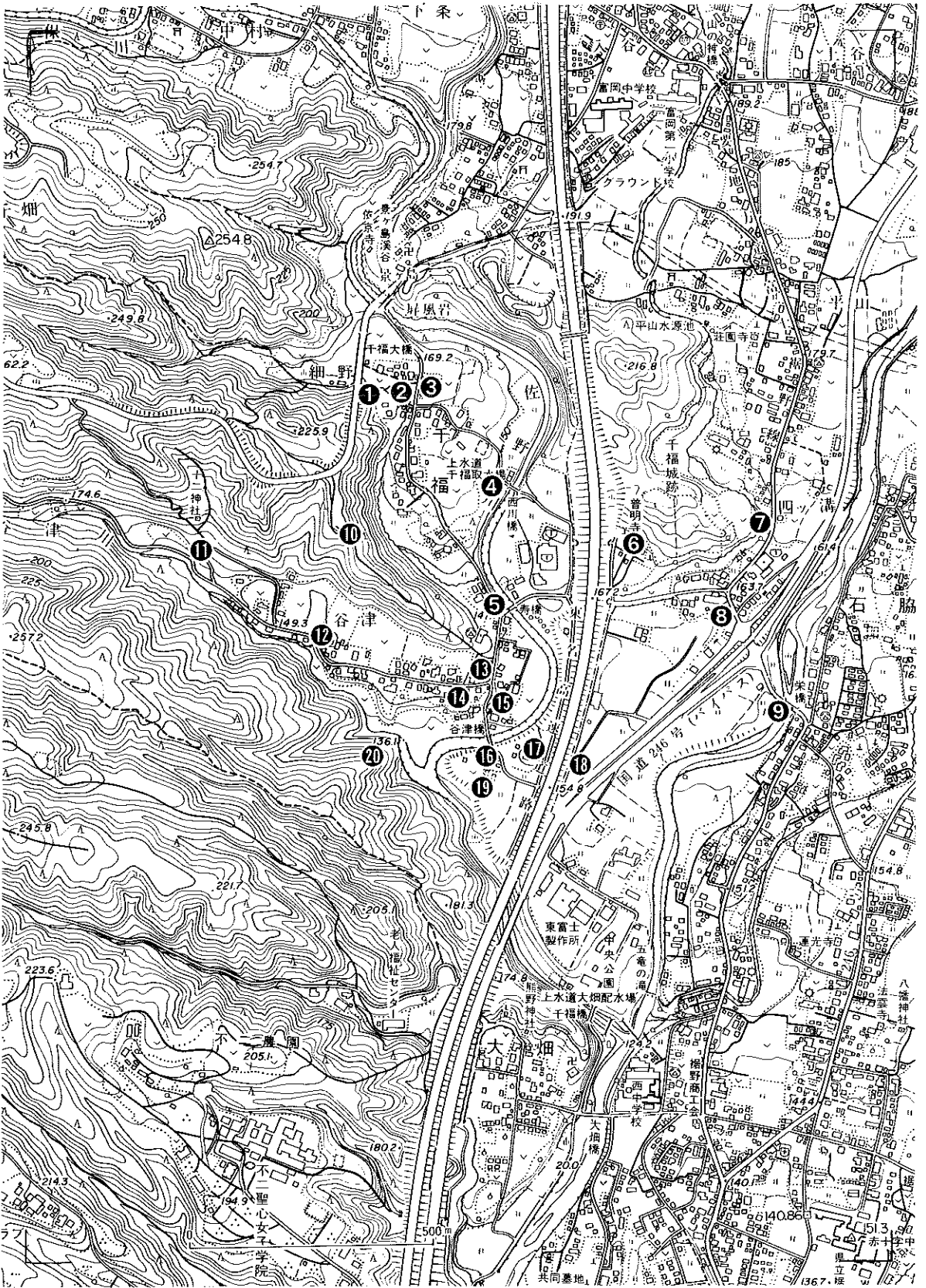
(伊 東 誠 司)

【「万霊塔」記載者忌日】

《 童 男 》		
戒 名	月 日	事 項
遊 誓	12月9日	中里 甚四郎、息。12歳。
利 春	1月17日	西久保 曾平、息。
義 天	1月19日	田場沢 源助、息。3歳。
理 竟	1月20日	田場沢 源助、息。
止 覚	1月24日	村 仲右衛門、孫。市五郎。
衍 岳	1月25日	千福村 惣八郎、息。
速 成	2月5日	田場沢 善六、息。
頂 円	2月7日	セン口 長右衛門、息。
松 欣	2月19日	上 甚助、息、若松。
良 説	2月20日	上 傳右衛門、息。
枝 香	2月21日	御宿 市兵衛、孫。
梅 円	2月24日	下 太兵衛、息。
義 還	2月27日	(村カ) 大工甚助、息。
朝 教	3月2日	下 唯右衛門、息。
常 和	3月2日	(村) 岡右衛門、息。
紅 樹	3月4日	下 五兵衛、息。
演 達	3月22日	上 今右衛門、息。
《 童 女 》		
恵 春	1月18日	大善院、娘。2歳。
竟 安	1月20日	中里 甚四郎、娘。
容含貞秀	1月28日	下 幸助、娘。8歳。
覚 応	2月1日	田場沢 仁兵衛、娘。
易 察	2月2日	下 惣七郎、娘。
値 縁	2月4日	御宿 長四郎、娘。
尔 善	2月14日	西久保 曾平、娘。
稚 暁	2月9日	大久保 喜右衛門、娘。
好 珠	2月4日	(村) 勝右衛門内さか、娘。
花 香	2月13日	(村) 勝右衛門内さか、娘。
量 幻	2月14日	中里 太右衛門、孫。
恵 開	2月30日	西久保 喜八、娘。7歳。
禅 戒	3月11日	西村 定七郎、(娘カ)、おフシ。8歳。

○戒名の順は原資料の通りである。

千福地区



千福地区



1 馬頭観音



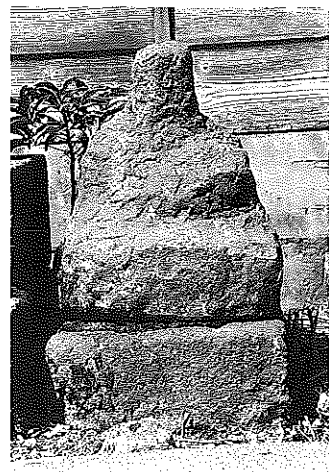
2 千福808-3 鈴木氏邸前



2-3 道祖神



2-2 順礼供養塔(西・秩・坂)



2-1 羅漢



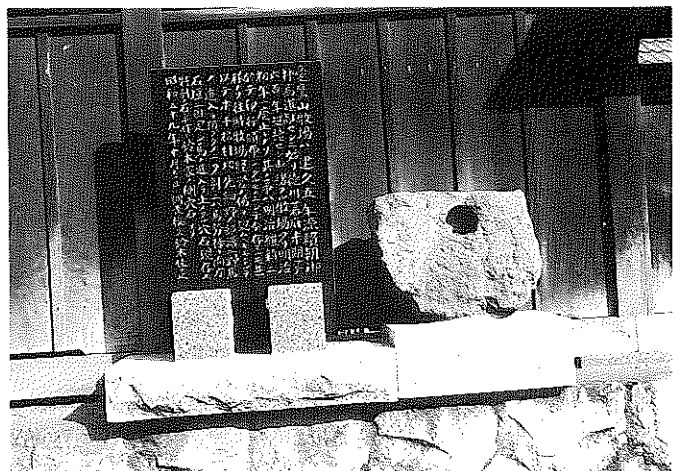
2-6 常夜塔



2-5 庚申塔



2-4 道祖神



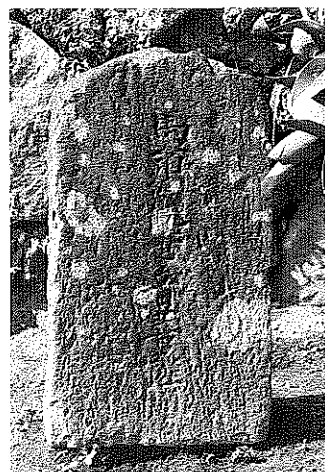
3-1・2 馬止め石・碑



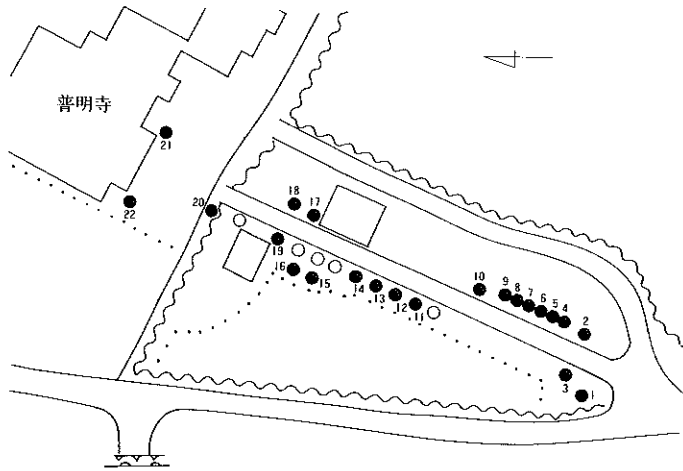
5-2 道祖神



5-1 道祖神



4 馬頭観音



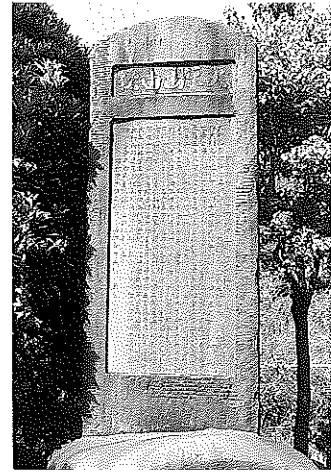
6 普明寺



6-3 石灯笼



6-2 石灯笼



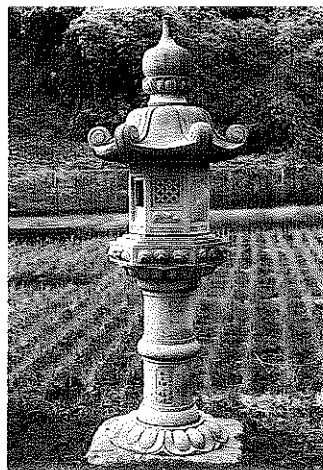
6-1 碑 (大平山由来)



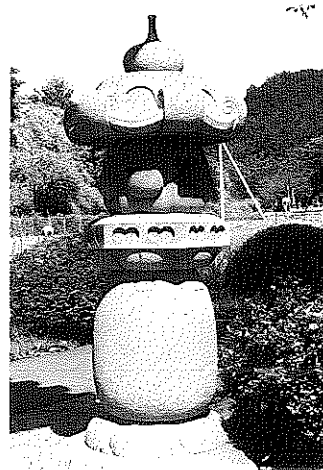
6-4~9 地蔵菩薩 (六地藏)



6-12 石灯笼



6-11 石灯笼



6-10 石灯笼



6 普明寺境内



6-15 万壺塔



6-14 石灯笼



6-13 石灯笼



6-19 石灯笼



6-17 石灯笼



6-16 馬頭観音



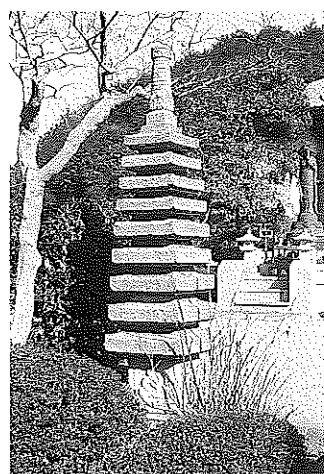
6-18 手洗石



6-22 石灯笼



6-21 石灯笼



6-20 層塔



7 千福バス停留所



7-3 道祖神



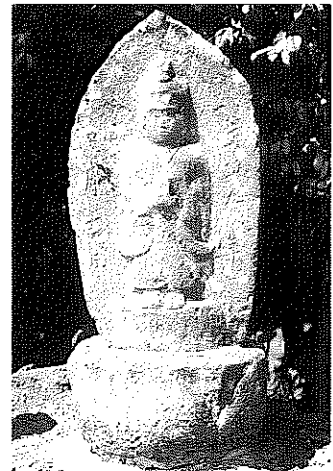
7-2 庚申塔



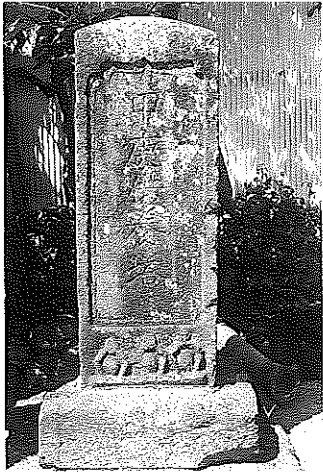
7-1 常夜塔（部分）



7-5 馬頭観音



7-4 馬頭観音



8-2 庚申塔



8-1 道祖神



10 馬頭観音



9 観世音菩薩



8-3 馬頭観音



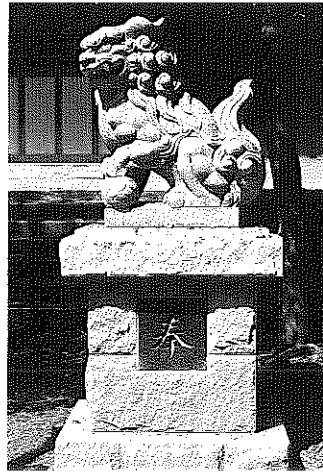
11-2 水神塔



11-1 道祖神



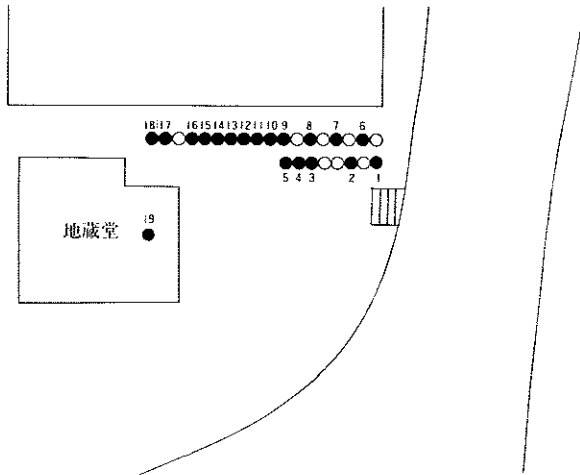
11-5 狛犬



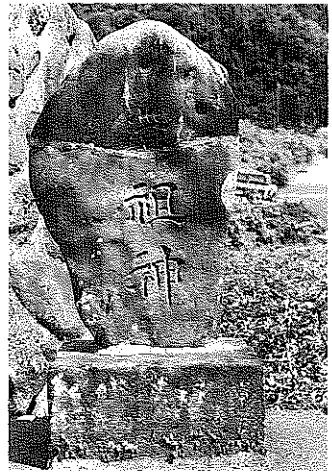
11-4 狛犬



11-3 石灯笼 (部分)



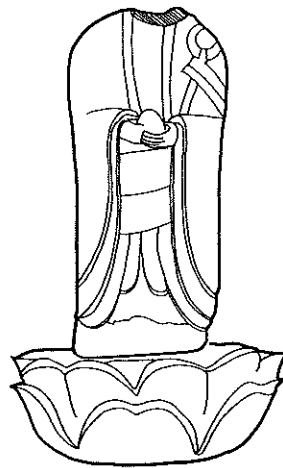
13 地藏堂



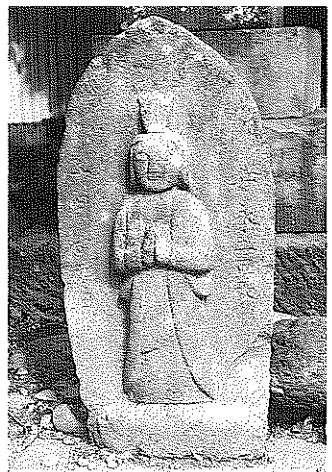
12 道祖神



13-6 石造物 (不明)



13-2 地藏菩薩



13-1 馬頭観音



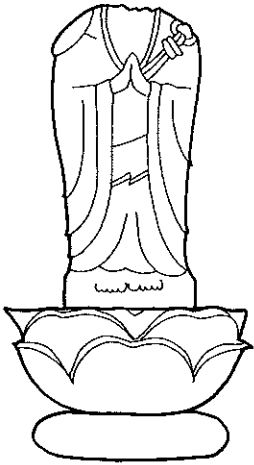
13-11 馬頭観音



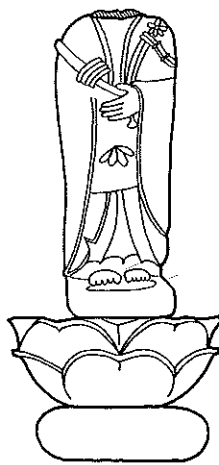
13-10 庚申塔



13-9 庚申塔（部分）



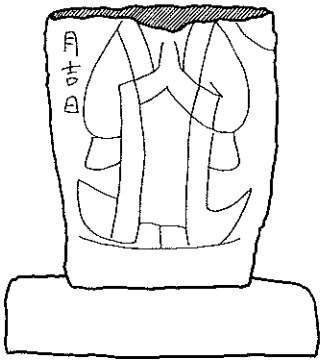
13-14 地藏菩薩



13-13 地藏菩薩



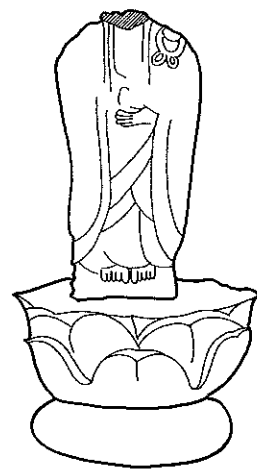
13-12 地藏菩薩



13-17 石造物（不明）



13-16 馬頭観音



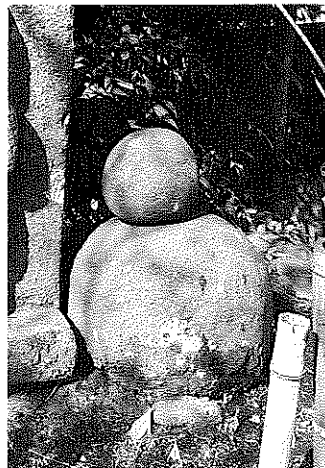
13-15 地藏菩薩



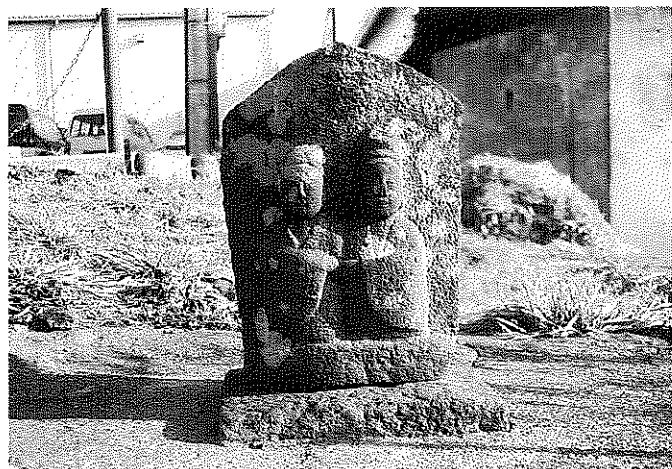
15 道祖神



14-2 馬頭観音



14-1 道祖神



18 道祖神



16 万霊塔



17-3 五輪塔



17-2 石灯籠



17-1 順礼供養塔(西・秩・坂)



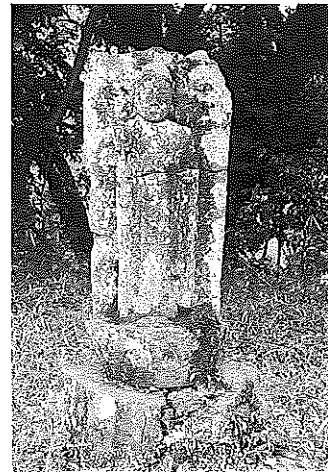
19 天泉寺跡



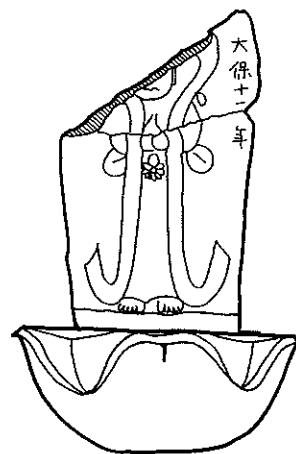
19-4 順礼供養塔(四・坂・秩・横)



19-2 順礼供養塔(横)



19-1 順礼供養塔



19-6 石造物(不明)



19-5 馬頭観音



20-1 宝篋印塔・五輪塔混合



20 千福533 横山氏邸南山中



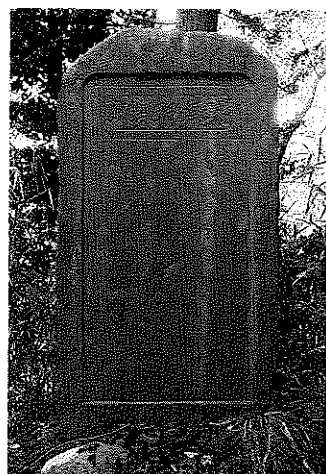
20-4 宝篋印塔・五輪塔混合



20-3 五輪塔（部分）



20-2 宝篋印塔・五輪塔混合



20-5 碑（墓標移轉碑）

千福地区石造物一覽表

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
3-2	碑(馬止め石碑)	板石	昭和59(二九八四)	85×63	別記1(295頁)
3-1	石造物(馬止め石)	自然石		32×36	
2-6	常夜塔	灯籠	文化4(二八〇七)	186×75	(正)常夜燈 (右)文化四丁卯年十一月日 (左)細野講中 (火袋欠落)
2-5	庚申塔	自然石	寛政12(二八〇〇)	141×98	(正)庚申供養塔 寛政十二庚申歲 仲秋吉日 細野講中
2-4	道祖神(双体)	舟型立像		57×45	
2-3	道祖神(双体)	駒型くり 抜立像		74×48	(顏面部風化)
2-2	順礼供養塔 (西・秩・坂)	櫛型	寛政12(二八〇〇)	90×50	(正)札所百番供養塔 (右)寛政十二庚申年 (左)八月廿八日 施主荻田氏 半左衛門
2-1	羅漢	丸彫座像		53×33	(風化)
1	馬頭観音	自然石		56×26	(風化)






6-6	6-5	6-4	6-3	6-2	6-1	5-2	5-1	4	番号
地藏菩薩 (六地藏)	地藏菩薩 (六地藏)	地藏菩薩 (六地藏)	石灯籠	石灯籠	碑(大平山由来)	道祖神	道祖神 (双体)	馬頭観音	種類
丸彫立像	丸彫立像	丸彫立像	灯籠	灯籠	板石	自然石	立くり 像抜	櫛型	形状
昭和45 (一九七〇)	昭和45 (一九七〇)	昭和45 (一九七〇)	昭和57 (一九八二)	昭和55 (一九八〇)	昭和44 (一九六九)				造立年
90× 22	90× 22	90× 22	178× 72	178× 72	370× 122	41× 35	48× 32	45× 26	法量 (cm)
(台座正) 金剛悲 六地藏尊 昭和45年秋彼岸 寄進者 細野鈴木芳光	(台座正) 金剛宝 六地藏尊 昭和45年秋彼岸 寄進者 細野鈴木芳光	(台座正) 金剛願 六地藏尊 昭和45年秋彼岸 寄進者 細野鈴木芳光	(左) 為先祖代々菩提 昭和五十七年九月 施主 谷津 市川嘉一	(左) 為先祖代々菩提 昭和五十五年八月 施主 谷津 市川隆義	別記2 (295頁)			(正) 馬頭観世音菩薩	銘文 (備考)
						(風化)	(風化)		

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
6-15	万靈塔	自然石	正徳6 (一七一六)	206 × 105	(正) ○ 萬靈塔 (左) 正徳六丙申年壬秋吉旦 寄主惣村現一毛立爲
6-14	石灯籠	灯籠		165 × 72	(右) 為亡夫菩提 施主秋山とし子
6-13	石灯籠	灯籠		165 × 72	(右) 為亡夫菩提 施主西脇ヤズ子
6-12	石灯籠	灯籠		182 × 72	(右) 為先祖代々菩提 施主荻田よし
6-11	石灯籠	灯籠		182 × 72	(右) 為先祖代々菩薩 施主横山寿男 今徳江
6-10	石灯籠	灯籠		175 × 35	(右) 贈 三島市秋 川崎元頌
6-9	地藏菩薩(六地藏)	丸彫立像	昭和45 (一九七〇)	90 × 22	(台座正) 預天賀 六地藏尊 昭和45年秋彼岸 寄進者 細野鈴木芳光
6-8	地藏菩薩(六地藏)	丸彫立像	昭和45 (一九七〇)	90 × 22	(台座正) 放光王 六地藏尊 昭和45年秋彼岸 寄進者 細野鈴木芳光
6-7	地藏菩薩(六地藏)	丸彫立像	昭和45 (一九七〇)	90 × 22	(台座正) 金剛幢 六地藏尊 昭和45年秋彼岸 寄進者 細野鈴木芳光

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
7-16	馬頭観音	浮彫座像	大正8(一九一九)	64×25	(正) 馬頭観世音 (右) 大正八年 五月十八日 (左) 市川源太郎
6-17	石灯籠	灯籠	正徳6(二七二六)	146×50	(正) 辨夫寶前 石燈籠 壽主 西嶋宇右衛門 (右) 正徳六丙申 三月吉日 (左) 現十五世 一毛代 (宝珠欠損 火袋補修)
6-18	手洗石	箱型	平成6(一九九四)	62×122	(正) 心洗 (左) 為先祖代々菩薩 平成六年五月吉日 施主神山 小林一雄 和江
6-19	石灯籠	灯籠		184×62	(右) 為先祖代々菩提 施主 横山昌弘
6-20	層塔	九重	昭和44(一九六九)	290×61	(基礎背) 為亡父母精進菩提 昭和四十四年十二月 施主池谷兼吉 全ふく 全守夫 全君江
6-21	石灯籠	灯籠	昭和45(一九七〇)	255×91	(左) 為先祖代々菩提 二本松横山昨平 御宿外川茂雄 石脇植松春雄 昭和四十五年七月
6-22	石灯籠	灯籠	昭和45(一九七〇)	255×91	(左) 為先祖代々菩提 四ッ溝吉川健治 妻ふみ江 母とよ 昭和四十五年十月
7-1	常夜塔	灯籠	文化12(二八一五)	169×60	(正) 常夜燈 (右) 文化十二乙亥歳仲秋日 (左) 四溝講中 (火袋補修)
7-2	庚申塔	自然石		113×91	(正) 庚申塔

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
10	馬頭観音	舟型立像		49×28	
9	観世音菩薩	自然石		110×96	(正) 奉供 [] 観世音菩薩 千福村 正木口衛門 (風化)
8-3	馬頭観音	櫛型角柱 くり抜	寛政8 (一七九六)	109×55	(右) 寛政八辰年 世話人 千福邑 渡辺定右衛門 佐野邑 秋山庄左衛門 (左) 十一月吉日 (一部欠落)
8-2	庚申塔	山型角柱	宝曆2 (一七五二)	120×78	(正) 申庚供養塔 (右) 寶曆二壬申歲 渡邊定右衛門 池野谷奥右衛門 同源八郎 高橋伊八郎 (左) 十一月日 西嶋壯兵衛 同清三郎 渡邊留内 横山伊兵衛 勝又傳兵衛 (一部欠落・風化・二猿浮彫)
8-1	道祖神(双体)	駒型くり 抜立像		55×70	(顔面部風化)
7-5	馬頭観音	舟型立像	元文5 (一七四〇)	66×47	(右) 華屋妙連信女 (左) 元文五庚申五月廿一日 (一部欠落)
7-4	馬頭観音	舟型立像	文政9 (一八二六)	80×65	(正) 文政九戌年 四月吉日
7-3	道祖神(单体)	舟型立像	安政3 (一八五六)	72×66	(正) 安政三丙辰年 西島政兵衛

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文	(備考)
13 13	地藏菩薩 (六地藏)	丸彫立像		21 × 18		(上部欠落)
13 12	地藏菩薩 (六地藏)	丸彫立像		76 × 52		(頭部欠落・風化)
13 11	馬頭観音	舟型立像	安永2 (一七七三)	83 × 40	(正) 安永二巨天 十月十九日	(舟型一部欠落)
12	道祖神	自然石		105 × 51	(正) 道祖神	(中央部割れ目)
11 15	狛犬		昭和47 (一九七二)	182 × 70	(正) 献 (背) 昭和47年12月吉日建之	
11 14	狛犬			175 × 72	(正) 奉 (背) 寄進 千福細野 鈴木芳光	
11 13	石灯籠	灯籠	宝永7 (一七一〇)	115 × 49	別記3 (295頁)	(宝珠・火袋・中台部欠落)
11 12	水神塔	自然石	昭和31 (一九五六)	69 × 40	(正) 水神 昭和三十一年月	
11 11	道祖神 (丸石)	自然石		26 × 33		

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
13-4	地藏菩薩 (六地藏)	丸彫立像		21×18	(上部欠落)
13-5	石造物(不明)			21×45	(残存 笠部)
13-6	石造物(不明)	自然石		123×67	(正) 憶家  念正碑  甲卯因  因月  日  山
13-7	石灯笼	灯笼		74×44	別記4 (295頁) (残存 竿部・基礎部 竿部補修)
13-8	石造物(不明)			70×41	(正) 願主 道清上口 (残存 宝珠部 上下別石)
13-9	庚申塔	笠唐破風 角柱	天和2 (一六八二)	107×68	別記5 (295頁) (宝珠・笠部倒壊 三猿浮彫)
13-10	庚申塔	山型角柱	宝曆6 (一七五六)	97×69	別記6 (296頁) (一部欠落)
13-11	馬頭観音	舟型立像	寛政9 (一七九七)	98×43	(正) 寛政九丁巳年 四月吉日 禪了
13-12	地藏菩薩	丸彫立像	延享3 (一七四六)	72×41	(台座) 延享丙寅 七月吉日 願主 明順清 施主市川茂助

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
15	道祖神(双体)	笠付浮彫		56×37	(風化)
14 2	馬頭観音	舟型立像		64×31	
14 1	道祖神(丸石)	自然石		37×30	
13 18	石造物(不明)	角柱	元文3 (二七三八)	74×25	(正) 渡邊兵左衛門 同内 (背) 西園彦左衛門 (右) 寄附施主記 (左) 元文三戌午 九月日
13 17	石造物(不明)	浮彫立像		43×39	(正) 横山羌一郎 (上部欠落)
13 16	馬頭観音	舟型立像	文政7 (二八二四)	72×40	(正) 文政七申夫 十一月日
13 15	地藏菩薩(六地藏)	丸彫立像		80×47	(頭部欠落)
13 14	地藏菩薩(六地藏)	丸彫立像		77×47	(頭部欠落)
13 13	地藏菩薩(六地藏)	丸彫立像		77×48	(頭部欠落)

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文	(備考)
19 4	順礼供養塔 (西・坂・秩・横堂)	山型角柱	享保12 (一七二七)	92 × 83	(正) 西國坂東秩又横堂 供養塔 (背) 導師現普明田變動之	(右) 享保十二年 (左) 九月吉日
19 3	石造物(不明)			33 × 41		
19 2	順礼供養塔 (横)		正徳3 (一七二三)	104 × 50	別記9 (296頁)	(上下相違)
19 1	順礼供養塔	舟型立像	貞享2 (一六八五)	97 × 65	別記8 (296頁)	(舟型半部欠落・中央部割れ目)
18	道祖神(双体)	舟型立像		55 × 43		
17 3	五輪塔		宝永7 (一七一〇)	83 × 37	(正) 空風火水地 (地輪左) 宝永七〇〇 三月廿〇日 西嶋宗衛門 匠仁作之	
17 2	石灯籠	灯籠	宝永7 (一七一〇)	152 × 50	(正) 奉寄進石燈籠基為西 干時 宝永七庚寅年八月 大畑	(竿部土中埋没)
17 1	順礼供養塔 (西・秩・坂)	灯籠	宝永7 (一七一〇)	174 × 49	別記7 (296頁)	
16	万霊塔	自然石	宝曆2 (一七五二)	163 × 126	(正) 〇 萬霊塔 寶曆二壬申歲 四月 施主惠玄	

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
13 19	地藏菩薩	浮彫座像		41 × 30	(千福地藏室内)
20 5	碑 (墓標移轉碑)	板 石	昭和4 (一九二九)	100 × 72	別記10 (297頁)
20 4	宝篋印塔・ 五輪塔混合			55 × 27	(残存 五輪塔火・水輪・基礎部)
20 3	五輪塔(部分)			35 × 20	(残存 火・水輪・基礎部)
20 2	宝篋印塔・ 五輪塔混合			85 × 36	(残存 宝篋印塔笠・塔身・基礎・基壇部 五輪塔水・地輪・基礎部)
20 1	宝篋印塔・ 五輪塔混合			64 × 23	(残存 宝篋印塔笠部 五輪塔火・水・地輪・基礎部)
19 7	石造物(不明)			33 × 41	(残存 基礎部・蓮華部)
19 6	石造物(不明)	浮彫立像	天保15 (一八四四)	70 × 47	(正) 天保十五年 辰十二月吉日 横山利右衛門(下部欠落・中央部割れ目)
19 5	馬頭観音	舟型立像	享和2 (一八〇二)	74 × 45	(正) 享和二年 壬戌年 十二月吉日 願主 西寫大吉 西嶋彦左衛門

別記1 碑(馬止め石碑)

(正) 愛鷹山牧場ハ建久五年源頼朝御神馬進献セシニ始リ徳川幕府末期マデ六百年繼續セシ由緒アル牧場タリ明治初年ニ廢止トナリ基ノ事ハ明治維新ニ於テ印行領布シタルモノニシテ今存スルモ甚稀ナリ往時牧場經營ノ儀ヲ認ムベキモノナルヲ以テ本千福村地先細野ノ部落ニ野馬ノ進入ヲ防グタメニ夕刻ニハ馬勢棒ヲ両方石垣ニ固定シ馬ノ進入ヲ止メタル穴石現存ス特別ノ石ニテ作り鈴木家ノ側穴石ナリ
昭和五十九年十月吉日 調査撰文鈴木住正

別記2 碑(大平山由来)

(正) 大平山由来 駿東郡誌並駿河国新風土記より抜萃
大平山普明寺は早川海藏寺末にて本尊釈迦牟尼佛寺格小本寺安叟宗楞大和尚開祖にて文明十六年九月示寂今より四八五年前なり初め見性寺と号し細野の地にあり今の地域は祖越御宿勘兵衛の居館の趾也元龜三年武田信玄名を普明寺と改めしむ同年武田家より寺領の寄付状と共に馬頭観世音の像一体の寄進あり後徳川三代將軍家光公寺領として十三石の御朱印を与えらる 当寺は数ヶ寺の末寺を有する古刹にして大正十四年廿九代老梅一枝大和尚は大畑加藤幾太郎氏佐野市川源太郎氏より各金三百円宛の御寄付を受け曹洞宗最高の常恒会地に昇格す 然るに昭和二年十月火を失し天保二年建立に係る本堂間口十一間奥行七間庫裡等一切を烏有に

婦す同三年現在の假本堂同六年鐘樓堂を竣工す廿二代天産代に鎮守堂庫裡寺を再建現住は一枝大和尚の遺志を繼承し尚緋恩衣特許拜受に当り全檀家各位の淨財を仰ぎ當時の由来を略記しこの碑を建立す

昭和四十四年八月 普明寺廿二代天産撰書

別記3 石灯籠

(正) 十二所大権現石燈籠 宝永七年 閏八月吉日
千福之住願主 西嶋平七郎 横山右衛門 同平八郎
鈴木新八郎 同加左右門 西嶋武兵衛 秋山源六郎
渡口九兵衛 池谷伊兵衛

別記4 石灯籠

(正) 供□庚申石燈籠 □
太兵衛 □ 平右衛門 □ 兵衛 □
同八郎兵衛 横山 □ 関 □ 衛 同平六
同七衛 □ 同平兵衛 秋山庄兵衛 □ 太衛 □
同八衛門 同六兵衛 □ 同加左 □
同大 □ 郎 □ 六郎右衛門 同太郎兵衛 同勘衛門
渡口市兵衛 同権兵衛 中野権三郎 高橋重衛門
表川政衛門 □ 嶋勘左衛門 鈴木六郎左衛門

別記5 庚申塔

(正) 遮惡持善各束身長圍六度拜庚申
儲成四輩見因益鬘石巍窠塔様新

(左) 日□東海道駿州駿河郡鮎澤莊千福村居住奉三寶第□□

生來奉一季六巡之庚申而習以為庸□□正是其時哉村神

三楊□□興起六和之精誠請卍令菜僧諷誦法花普門

品首棲嚴神□□石塔以宮徵供切□功勳回向真□實

際常□三寶果海□□庚申尊星天地□內大小明靈扶

桑大小神祇亘府□伏信□□

(背) 与助縁□衆現□內並關受由稔寫子孫榮盛永不斷絕當□

脫塵勞發禪園花速佛遍處結竟煩集乃至法界平等利益矣

至祝 千時天和二壬戌年九月十庚申日

日明現住□□性卯謹誌焉出□願□淨元 困播

道榮 宗悅

(右) 願衆 西嶋次□ 同忠左衛門 同長兵衛 同新左衛門

同多兵衛 同六郎右門 高橋武右門 同忠兵衛

仁藤次郎左衛門 中野金兵衛 市川権左衛門

横山半左衛門 同文左衛門 同長左衛門 同源衛門

同半兵衛 同七衛門 池野谷太郎兵衛 秋山莊兵衛

渡辺九郎左衛門 鈴木六兵衛 同賀左衛門

同市左衛門 同六郎左衛門 同四郎兵衛 同七兵衛

□□ 弥左衛門 大畑村市川四郎兵衛

別有助縁衆忠左衛門

別記6 庚申塔

(正) 庚申供養塔

(右) 横山文左衛門 同清左衛門 同半左衛門 同源左衛門

同利八 鈴木新太郎 渡□善助

(左) 西島太兵衛 同茂右衛門 同治右衛門 同篤右衛門

中野半右衛門 市川武助 高橋次兵衛 伊藤茂兵衛

(背) 寶曆六丙子九月日 普明現住登丹誌之

別記7 順礼供養塔(西・秩・坂)

(正) 奉寄進石燈一基西国秩父坂東順礼供養也

千時 宝永七庚子年八月吉日建焉 造立施主

千福之住 西嶋武兵衛 同事慎 鈴木加左右衛門

渡辺九兵衛 池谷保兵衛 同喜八郎

石工信州之住 池上市郎兵衛

別記8 順礼供養塔

(正) □□三十三所□□而建立像以□供養

千時貞享二歲正七月千福村

(台座正) □□ 同妻 同名忠左衛門 同妻

(台座正左) 横山源右衛門 同妻 同名六郎衛 同妻

同名称兵衛

(台座背右) 勝間田□衛門 同母 高橋善兵衛 同内伊左門

同妻

(台座背左) 横山角右衛門 同母 磯部九兵衛 同母

同名 □□

(台座正右) 鈴木□□衛門 同母 □□ 清□郎

別記9 順礼供養塔(横)

(上部六角背) 奉造立横道供養塔

正徳三癸巳歲 八月廿二日

(上部六角背左) 中野権三郎 佐野村日吉九右衛門母

加藤忠右衛門妻 佐野村市川九郎左衛門妻

池野谷善左衛門 同加助

(上部六角正右) 横山源右衛門 佐野村永田八右衛門

秋山庄兵衛 同清助 萩田庄左衛門

(上部六角正) 渡邊兵左衛門 同市兵衛 同同人妻

同源太郎

(上部六角正左) 渡邊権兵衛 佐野村土屋源四郎母

鈴木六郎左衛門 同六角右衛門妻 佐野村真田衛門

大畑村市川新平

(上部六角背右) 西嶋加め 同八郎兵衛

佐野村秋山藤右衛門母 横山利右衛門妻

同源右衛門妻

(正) 銘曰 浚涉功破幽冥 即令誓即円成

施主西嶋宇右衛門 横山利右衛門妻

秋山庄兵衛妻 鈴木新五衛門妹志津 鈴木六兵衛

同八右衛門 表川左衛門 片岡清兵衛 渡嶋庄九郎

別記10 碑(墓標移轉碑)

(正) 墓標移轉碑 高祖豊後守政影之墳墓ハ舊ト青松寺塋域

ニアリシモ安政二年拾月大震災ノ爲メ塋域ノ斷崖ヲ崩

潰シ墓碑数本ヲ埋歿セリ尚大正十二年九月一日ノ大震

モ亦塋域ヲ壞崩セリ將來高祖ノ墓地・爲スベキ地ニ非

サルヲ以テ昭和四年十二月廿七日高祖ノ五輪ヲ本地ニ

移轉シ祭祀ヲ行ヒタリ記ヲ後世ニ傳フ矣
廿世ノ孫 横山健吾誌

種類別・年代別統計表

によって他の石造物としてとり上げてあるものの数。

種 類 西 暦 年 号	種 類 年 号	経 典 刻 塔	写 経 塔	養 誦 塔	塔 廻 国 塔	順 礼 供 養 塔	順 礼 ・ 順 拝 供 養 塔	そ の 他 の 供 養 塔	名 徳 因 名 号 塔	石 祠	碑					中世石造物		そ の 他 の 石 造 物	不 明 の 石 造 物	計		
											記 念 碑	頌 徳 碑	慰 霊 碑	文 学 碑	そ の 他 の 碑	宝 篋 印 塔	五 輪 塔					
1600以前	～慶長5															2	1				3	
1641～1650	寛永18～慶安3																					2
1651～1660	慶安4～万治3																					
1661～1670	寛文1～寛文10									(1)												(1) 8
1671～1680	寛文11～延宝8																					4
1681～1690	天和1～元禄3					1		1														(1) 6
1691～1700	元禄4～元禄13					2		1														(1) 6
1701～1710	元禄14～宝永7					3		1								1						(2) 8
1711～1720	正徳1～享保5					1	8	1		(1)												(2) 20
1721～1730	享保6～享保15						9	1														(2) 22
1731～1740	享保16～天文5					4														1		(5) 10
1741～1750	寛保1～寛延3				1	8		1		(1)												(6) 34
1751～1760	宝暦1～宝暦10				1	7																(2) 19
1761～1770	宝暦11～明和7					5																(1) 19
1771～1780	明和8～安永9					2																(1) 11
1781～1790	天明1～寛政2					2	1															6
1791～1800	寛政3～寛政12					6																16
1801～1810	享和1～文化7																					11
1811～1820	文化8～文政3					(1) 1																(1) 11
1821～1830	文政4～天保1																					7
1831～1840	天保2～天保11							1														(1) 6
1841～1850	天保12～嘉永3																			1		11
1851～1860	嘉永4～万延1																			1		20
1861～1870	文久1～明治3									(1)												(1) 9
1871～1880	明治4～明治13							1														10
1881～1890	明治14～明治23																			3		17
1891～1900	明治24～明治33										1				1					1		12
1901～1910	明治34～明治43									(2)	1				1							(2) 20
1911～1920	明治44～大正9										2	2	1									(1) 19
1921～1930	大正10～昭和5									(1)	3				1							(1) 21
1931～1940	昭和6～昭和15										1	2										16
1941～1950	昭和16～昭和25										1											6
1951～1960	昭和26～昭和35											1										10
1961～1970	昭和36～昭和45									(1)	3	1			3				1			(1) 17
1971～1980	昭和46～昭和55							1			3			4	3							19
1981～1990	昭和56～平成2										6				1							40
1991～1995	平成3～平成7										1			1	2							10
年月日不詳						1		1	1	(15) 2	4		1	1	1	11	5	12	5	17		(22) 256
計					3	(1) 59	1	10	1	(23) 2	26	6	2	6	13	13	6	13	11	19		(54) 742

地区別統計表

種 類 地 区 名	石 仏 石 神																												
	釋 刻 塔	典 寫 塔	供 誦 塔	塔 燼 塔	願 禮 供 養 塔	願 禮 ・ 願 作 供 養 塔	そ の 他 の 供 養 塔	名 号 題 目 塔					庚 像 塔	中 文 字 塔	塔 型	像 雙 體	道 塔 單 體	祖 文 字 塔	神 自 然 石 塔	子 待 塔	道 標	山 の 神 塔	水 塔	如 來	親				
								唯 念 名 号 塔	徳 因 名 号 塔	祐 天 名 号 塔	木 食 名 号 塔	そ の 他 の 名 号 塔													題 目 塔	真 言 文 字 塔	聖 觀 音	加 意 輪 觀 音	馬 尊 塔
須 山				1	15	2					1		2	3	3		6	2	1	(5)	6	5	9	(3)	3	1	12		
下 和 田					10	1						2		1	7		1	1			2	2	2	(2)	2		9		
今 里				2	(1) 3					2				2	3		2						2	(1)	(1)		7		
金 沢					5	1								2	1							2	3	(1)			1		
御 宿					9	3				5			3	3	4	2	3	3		(4)		1	(1)	(3)	(2)		11		
上 ケ 田					4					1				1	1		2							(1)		1	7		
葛 山					8	1	3		1		1	1		1	6	7	4	1					3	1	(1)	(2)	18		
千 福					5								2	3	6	1	1	3					1				10		
計				3	(1) 59	1	10		1	1	1	1	8	1	2	8	21	32	7	16	9	1	(9) 8	9	21	(1) 11	(12) 4	(5) 75	

石造物の種類別解説

經典供養塔（きょううてんくようとう）

經典供養塔には、經典の名称や経文、あるいは陀羅尼（だらに）^{（教}法や教理を記憶し保持するために用いる呪文）を銘文にした「刻経塔」、經典の読誦やその回数などを刻んだ「読誦塔」、經典の書写成就を記した「写経塔」、写経した經典を社寺に納経したり、地中に埋経したりしたことを刻銘した「納経塔」などがある。なぜこのような經典供養塔がつくられたのであろうか。

仏教では、その教えの中心となる經典を、維持し広めることは仏教徒の務めであり、また修業そのものであるとされ、そうした仏教徒としての任務の遂行にともなう功德には、計り知れないものがあるとされている。

仏教伝来当時、經典は文字どおり有ること難き希有の聖典であった。したがってその維持と管理（受持）は、防災の態勢も整わず管理の技術も発達していない時代において、まさに命がけの任務であったし、また經典内容の維持管理も容易ではなかった。すなわち、外国語としての經典を、一言半句遠慮することなく音読すること（誦）、これを暗誦すること（誦）、その意味するところをふまえて訓読（解説）することは、いずれも一朝一夕になし得ることでなく日常的修業を要するものであって、容易ならざる業であったのである。

また、仏法を世に広めるための經典の普及という面でも、

現在のような複写や印刷技術の発達していない時代においては、經典の増刷もままならず、一字一句書き記して經典を作成するという、最も手間のかかる筆写によらざるをえなかったのである。

このように經典の維持と普及が困難を伴うものであったがゆえに、そうした仏教徒の任務遂行には深い充実感が伴う功德の高い行為とされたのであるが、やがて時の経過とともに、逆に功德を得んがために經典を読み、誦し、写経するなどの宗教行為が生まれ、それが信仰行為として確立して今日に至っているのである。各種の經典供養塔はこうした背景の中から生まれたものであり、その大半のものが読・誦・書写（写経）の成就の際に建立されている。

刻経塔（こつきょうとう）

經典の名称や真言、あるいは経文の全部もしくは一部を塔に刻んだ石造物が刻経塔である。（本報告書では、刻経塔のうち当地方に数多く見られる名号塔および題目塔は、別に独立させて収録した。）

刻経塔が、どのような理由によって建立されたのか、すなわち經典保存のためであるのか、帰依する經典への信仰の表現なのか、あるいは読誦もしくは写経の成就完成を記念するものであるのか、必ずしも一定していない。

写経塔（しゃきょうとう）

経典を写すことであるが、それにはいくつかの目的や意味があるとされている。その一つは写経によって冥福を祈り供養すること、二には写経によって心の安らぎを得たり、功德を得られる、信仰を深めるといったほかに、経典を写経によって広めることや、写経したものを埋納したり霊地に納めて記念することがおこなわれている。

写経塔は銘文をよく読み、写経の目的、願主、関係する寺院、僧侶の名等を調査し、他の写経塔と比較検討することが必要であるとされている。

読誦塔（どくじゅとう）

経文を見ながら読むことを読経どききょうといい、経文をそらんにて唱えることを読誦どくじゆという。また読誦とは書物や文章を声を出して読むことであり、読誦は経文を読むことをいう。

経典供養塔の一つの読誦塔は特定の経典を読誦したことを記念して建てた塔である。

経典は本来、読まれ広められるためのものであるが、外国語としての経典を誤りなく読み、そらんにて読めるほどに繰り返し読むこと、すなわち読誦が修業として重視されるようになった。やがてそれは、平安末期ごろになって、信仰の深さを量的に測る傾向が生まれると、読誦が何部、何遍、あるいは何日行われたかということが重視されるようになり、石塔に刻銘して読誦の完了を記念することも行われるようになったのである。

裾野市深良興禪寺にある読誦塔は、「因唱弥陀名號百萬遍」と刻んであり、読誦という語は記されていない。「南無阿弥陀仏」を百万遍唱えたという記念塔であるがその読誦の圧倒的な量に、ただただ感服のほかない。

廻国塔（かいこくとう）

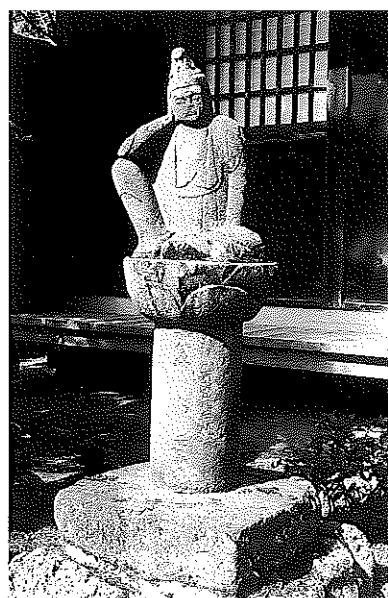
「奉納大乘妙典」「回国六十六部」「廻国」などの銘文のある石造物が廻国塔である。

この廻国塔は、経典供養塔のなかの、納経塔の一種と位置付けることができる。すなわち大乘妙典と呼ばれる法華経を六十六部写経し、わが国六十六カ国の霊場に一部ずつ納めて諸国を廻った記念塔である。法華経は八巻から成っており六十六部ということになると五百二十八巻の写経がなされており、これだけでも大事業である。

この廻国塔の建立の目的は、廻国成就を記念するものや、数年間に及ぶ廻国の大業の、志半ばにして不慮の死をとげた行者たちの供養のために造立されたものなどさまざまである。中でも、廻国してきた遊行僧（彼ら乞食僧は六十六部、あるいは六部と呼ばれた）に路銀を与え、霊場で先祖の供養を依頼したことを記念して建立した塔がもっとも多いとされている。

順礼・順拝供養塔（じゅんれい・じゅんぱいくようとう）

各地の神社仏閣、聖地霊場を訪れたり、参詣して回る民衆の順拝・順礼行為としては、伊勢神宮への参詣や善光寺



詣弘法大師ゆかりの地を回る四国八十八ヶ所めぐりなどが有名であるが、とりわけ観音信仰に基づく霊場巡りは民間信仰の中で大きな位置を占めるものである。

『法華経普門品』（『観音経』）の、観世音菩薩が三十三にその身を変えてこの世に現われ、衆生のあらゆる苦しみを救ってくれるという簡明な教えは広く民衆の心をとらえ、やがて、観世音菩薩を本尊とする三十三の寺を順礼するものには功德が得られるとの信仰が生まれた。

近畿地方一帯に点在する観音霊場に岐阜県華嚴寺を加えた「西国三十三ヶ所」、関東地方のいわゆる坂東八ヶ国順礼の「坂東三十三ヶ所」、埼玉県秩父市および秩父郡の「秩父三十三ヶ所（西国・坂東・秩父を合わせて百にするため、後に三十四ヶ所となった）」といった、よく知られた全国霊場だけでなく、例えば「駿河・伊豆（両国）横道三十三ヶ所」「駿河一国三十三ヶ所」など地方霊場も各地に生ま

れさらに小さな地域霊場が数多く設けられた。

こうしたさまざまな三十三ヶ所観音霊場を順拝する各種の順礼が、江戸時代の経済発展とともに広く庶民の間で行なわれるようになり、困難をとまなつた順礼を終えると、かれらは多様な順礼供養塔を建立したのである。

裾野市の石造物をみると、観音信仰に基づく順礼供養塔が多いことに気付かされる。そこで本書では、その特徴を明確に示すために、観音信仰に基づく順礼供養塔を「順礼塔」と表わし、「遍路」と呼ばれている四国八十八ヶ所の順拝やその他の寺社霊場への参詣にともなう石造物を「順拝塔」として分類した。

また「巡礼」「巡拝」と今日表記されているものも、裾野における多くの石造物の刻銘にならって、本書でも「順礼」「順拝」と表記したことは例言に記した通りである。

名号塔（みょうごうとう）

名号というのは阿弥陀如来をたたえる「南無阿弥陀仏」という言葉で、南無というのは「帰依する」という意味である。したがって名号の意味は「阿弥陀如来に帰依する」という意味になる。中国唐代の名僧善導大師（六一三〜八一）は、この名号の南無を願、阿弥陀仏を行とすると、願と行が共に具った六文字であるから、これを念じ唱える者は極楽往生できると説いた。この教えは平安時代のすえに末法思想、浄土信仰と結びつき、特に時宗を開いた一遍上人は、この名号を本尊としこれを唱えることによって、現



世から救われるとして、名号を民衆に広めたとされている。名号塔は自然石または切石に「南無阿弥陀仏」という六文字を刻んだもので、多くは念仏講、阿弥陀講などの講中によって建てられている。特にこの地方に多い唯念名号塔については、次項で解説をした。

唯念名号塔（ゆいねんみょうごうとう）

唯念は念仏専修の行者で、駿東郡小山町上野の唯念寺を創建したとされるが俗名は明らかでない。

「明治往生伝」によれば、寛政二年に熊本県八代郡の土族の生まれとある。一七歳で下総行徳村の徳願寺の誓誉和尚の元で仏門にはいる。その後北海道にわたるが、誓誉和尚が特命により、岩槻浄国寺へ移ると、唯念は誓誉和尚のもとを離れ、恐山（青森県）、月山（山形県）、八王子高尾山などで修行を繰り返す、文政六（一八一三）年駿河国上

野奥の沢（小山町）を訪れる。そして文政九年には、小山町菅沼に唯念の署名と花押の記された馬頭観音が建立されている。その後、富士山などでさらに修行を深め、天保六年に小山町上野奥の沢に念仏堂を創立する。

独特の文字で書かれた唯念名号塔は、静岡県東部地区を中心として、神奈川県、山梨県などで一六五見られる。年代の明らかかなものでは、嘉永（二八）、安政（三四）、明治（二九）に集中し、この三者で七三%をしめる。地域別に見ると三島市（一四）、修善寺町（一一）、小山町（一七）、沼津市（二七）、裾野市（一八）、函南町（一〇）と沼津市に特に多い。県別に見ると東部地区を中心とした静岡県が一三八と圧倒的に多く、神奈川県で二六、山梨県で一つ確認されている。

唯念名号塔は自然石を利用したものが多く、最大は小山町足柄峠下栗の木沢の四メートルで、裾野市の岩波駅前ものは二番目の大きさである。最も小さなものでは、七〇センチ弱の修善寺永松院の名号塔がある。

建立年代で見ると、馬頭観音に署名と花押を記した小山町菅沼の例を除くと、天保一四（一八四三）年の紀年号を持つ裾野市茶畑の願生寺境内のものが最も古く、逆に南足柄市千津島公会堂前の明治一八（一八八五）年のものが最も新しい。

裾野市の例では、茶畑の願生寺例が天保一四年で最も古く明治一二年の富沢例と切久保例が最も新しい。裾野全体では、嘉永年間のものが五例と集中している。

馬頭観音に唯念の花押などが見られる例は、先の小山町菅沼と御殿場二子の共同墓地参道にあるが、岸壁に彫り込まれた小山町奥の沢の奥行場例や裾野市下山神社裏例、さらに裾野市の願生寺例のように、名号と菩薩や如来像などが組み合わさったものとして、葦山寺家の光照寺門前例などがあるが、これらは唯念塔としては変わった例といえる。

唯念塔には正面中央の「南無阿弥陀仏」と、独特の文字で書かれた名号の左右に、菩薩像などをあしらったものと「天下泰平、国土安穩」などと書かれたものに大きく二分できるという（石井種生「唯念名号碑」一九九三）。これは極楽往生を希求した村人の願いととも、雨ごいや疫病送りの祈願をよく示す民間信仰の表れとも考えられる。

裾野市佐野バス停前に設置された、二・二メートルの大きさの、安政四年と紀年された例などは、当時大流行したコレラに対する疫病払いが祈念されたものかも知れない。

沼津市静浦地区の同じような安政四年紀年の唯念塔は、当時猛威を振るったコレラの疫病払いを祈念してのものであったと言えられている。

唯念塔からは、そうした村人の素朴な信仰を読みとることもできる。

題目塔（だいもくとう）

題目というの、本来は経典の題号をいう。日蓮宗、法華宗などでは法華経のなかに釈迦の教えの真髄があると説き、法華経の題号の妙法蓮華経に南無をつけて、南無妙法



蓮華経とし、この七文字の題目を唱えて、法華経を身につけ広めることを行としたのである。

この題目の唱行は信徒のなかで、題目講という組織ができた。この講中の人々によって題目塔が建てられるようになった。この塔は自然石、切石に南無妙法蓮華経の七文字を刻んだものが多い。

庚申塔（こうしんとう）

庚申というの、中国の暦で十干十二支の組合せにより、六十日目に回ってくる庚申の日のことである。中国の道教では、庚申の夜になると人体に宿っている三尸の虫が睡眠中に体から脱け出して天帝のところへ行き、その人の罪過を告げるので生命が奪われると信じられていたため、この夜は虫が出ないように徹夜で善行をし修業することが行なわれていた。このような庚申の夜の思想と修業が古代の日



本にも伝えられ、宮廷や貴族の間で行なわれるようになってきたが、やがて中世後半には民間にも信仰として広まり、庚申待とか庚申講という集団で行なう行事ともなっていた。またこの頃から庚申供養の石塔を建てるようになったとされている。

一方、庚申を「かのえさる」と読むところから庚申を申待ともいい、猿の信仰と結びつき、猿を御使とする大津市日吉二一社権現の信仰とも習合していったともされている。近世に入ると、庚申の夜は言葉や行いを慎むということから、孔子家語にある不言、不聞、不見の三緘、天台宗にいう不見、不聴、不言の三諦と関連させ、両手で目と口と耳をふさいだ三猿と、その本地仏（本尊）青面金剛を庚申の守護とするようになった。

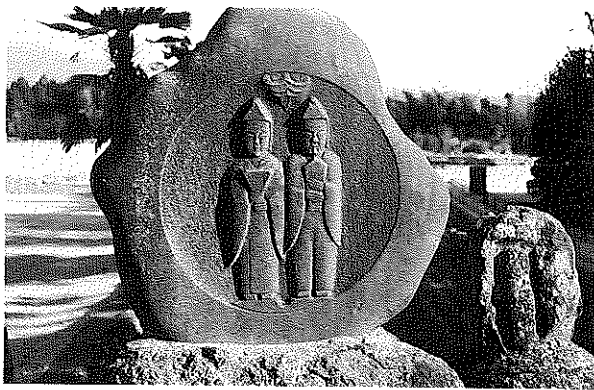
裾野市内の庚申塔は江戸時代の寛文の頃（二六六一〜七三）から建てられ、形は基盤、反花座、方形の塔身、笠、

道祖神（どうそしん）

宝珠と組立て、基盤の台座または方形塔身の下部に三猿を彫り、塔身に供養の銘文を刻んであるものがある。そのほか自然石や切石に青面金剛像と三猿を浮彫したもの、あるいは庚申供養塔、庚申塔、青面金剛の文字を刻んだものなどがある。

青面金剛というのは、青い顔をした金剛童子で、仏法を護る童子の一つ。三眼六臂で忿怒の形相をし、病魔や病魔を払うのに大威力があるとされるところから、庚申信仰の本尊とされるようになったといわれる。

もともとは道路の悪霊を防ぎ、通行人を護る神であったが、古代日本神話にあるイザナギがヨミノクニにいったイザナミを訪ねた時、その怒りにふれて逃げた途中、追ってきたヨミノシコメを止めるため、投げた杖から生



まれたというサエノカミと習合して、障の神あるいは塞の神とされ村の外つまり外界(ケ)と、内側の内界(ハレ)との境を守る神とされるようになったという。後世になると良縁、和合、妊娠、出産、幼児の守護を願い叶え、セキやシモの病などを直す俗信の神に変化したとされている。石像には、単神体の立像または座像を丸彫にしたもの、自然石または切石の片面に、双体あるいは単体の神像を浮彫したもの、この浮彫石像には屋根形、舟形などがあり、面を円形、楕円形、屋根形、矩形に削りを入れ、神像を浮彫にしその削りの頂点に懸魚けぎま、半菊花懸魚、逆三角形、雲形などの装飾の彫を入れたものなどがある。また自然石や切石に道祖神と文字を彫ったものや、自然石、丸石を道祖神としたものもある。

子待塔(ねまちとう)

子待というのは、庚申と同じように十干十二支の組合せで甲子の日あるいは子の日に、大黒天を祭ることをいう。大黒天はもとインドのバラモン教の最高神シバの別名大自在の化身であったが、仏教の守護神となり、さらに七福神の一つになった。日本では古代出雲の国神、大國主おおくにやと習合して広く民間に信仰されるようになった。近世の農村では豊作をもたらす神と一体となり、人々は甲子講、子持講という組織をつくり、甲子の日、当番の家では大黒天を画いた掛軸をかけ、講中の人々が集まって祈願した後、飲食歓談するという娯楽の日でもあった。

石像で大黒天の丸彫、浮彫したものもあるが、自然石や切石に大黒天あるいは甲子塔と文字を刻んだものが多い。

水神塔(すいじんとう)

水の神を祀った石塔で、神像を丸彫にしたものは少なく自然石や切石に「水神」、「水神宮」などと刻んだ文字碑が多い。水神に弁財天がまつられることは、弁財天の項で述べた。このほか龍も水神としてまつられる。

水神塔は用水池、用水路の分岐点、水源地、井戸などに建てられる。

如来(によらい)

如来というのは、実体や真実をよく理解し体得して人間界のすべての迷いや苦しみを救ってくれる、最高の仏とされる。如来像はこのようなすべての悟りをひらいた仏の姿をあらわすものであるから、極めて簡素な着衣だけで、菩薩像にみるような装身具は身につけていない。頭髮は螺髪という頭髮をまるめた巻毛の粒にしたもので、その頂上を腕を伏せたような形に盛りあげている。額の中央に白毫という白毛をまるめた印をつけている。着衣はゆったりとしたもので、左肩から右下へ肩かけのような形の袈裟姿をしたものもある。

如来像には衆生を救う分担や役割あるいは教典の趣旨などによって、釈迦・阿弥陀・薬師・大日如来などがある。像としては丸彫の立像と座像、自然石や切石に立像や座像

の浮彫にしたものなどがある。

ところで如来像は上半身がそれぞれよく似ているので区別が難しいが、釈迦如来は右手をひじのところで折り曲げ、手のひらの先を肩の線まであげて前を向け五指を伸ばし、左手はさげて手のひらを前に向けた姿をしている。釈迦三尊という場合は中央に本尊を据え、その左右両脇に文殊菩薩と普賢菩薩像を配している。このうち文殊は獅子に乗り左手に宝剣を持ち、普賢は象に乗って合掌するのが決まった形であるという。

阿弥陀如来は西方にあるとされる極楽浄土をつかさどる最高の仏とされ、その信者は死後極楽浄土に生まれ変わる事ができるといわれ、中世以後広く人々に信仰されるようになった(名号塔の項参照)。この像の座像の場合、両手のそれぞれの親指と人さし指の指先をつけ、以下の指を折り曲げて両指の背、つまり外側をつけた形をしているのが一般的な姿であるという。阿弥陀三尊の場合は本尊の左右両脇に観音菩薩と勢至菩薩を配し、観音は頭上に阿弥陀立像を乗せ、勢至は宝瓶をつけている。

薬師如来は字のように万病を治し寿命を延ばし医薬をつかさどる仏であるとされ、広く人々に信仰されている。この像は右手の肘のところから腕を前に延ばして手のひらを前に向け、左手に薬壺を持っているのが特徴とされる。薬師三尊の場合は左右両脇に日光、月光菩薩を配し、それぞれ内側の手に日輪と月輪の形をつけた持物の柄を握っている。大日如来は全宇宙を仏としたもので、その威力は日の

神の上に立つところから大日如来といわれている。

この像は他の如来像と異なり、頭に宝冠をかぶり垂れ飾りをつけ、胸の前で左手の人さし指を右手で握る姿をしている。また別に両手の親指の先端を合わせ、他の指を重ねたものもあるが、数は少ないとされている。大日如来には三尊像は見られない。

寝釈迦(ねしゃか)

涅槃像のことで、釈迦が八十年の長い説法を終えて、クシナガラというところの沙羅双樹の下で、北を枕に西を向いて右脇を下にし身を横たえ、涅槃に入ろうとする姿をあらわしたものだ。涅槃というのは、絶対自由となり永遠の至福の状態をいい、後に釈迦の死をいうようになった。

裾野市滝頭の寝釈迦像は類例がなく珍しい石造物である。

観世音菩薩(かんぜおんぼさつ)

この仏は人々のすべての願いごとを聞き、それをかなえ苦しみを救ってくれるというので観世音といい、それに応ずるように三十三の姿をしてこの世に現れる。これを三十三観音といって平安時代以来から、西国、坂東、秩父などに、これらの観音をまつる霊場ができた。この地方でも横道三十三観音という霊場ができて、観音信仰の対象となり、集団でそれらを巡拝したという供養塔が多い。

この三十三観音のなかで聖観音といわれる観音が最も一般的なもので、その姿は頭上に阿弥陀如来の化仏を配した

宝冠を乗せ、左手に蓮華の茎を持ち、右の手のひらを蓮華の花にそえる形のものが多い。

また餓鬼、地獄、畜生、修羅、人、天の六道で人々の苦しみを救ってくれるという六体の観音があり、これを六観音といって、古くから信仰されている。この六道のうち餓鬼道には聖観音、地獄道には千手観音、畜生道には馬頭観音、修羅道には十一面観音、人道には准提（または准胝）観音、天道には如意輪観音が配されている。天台宗では人道の観音に不空絹索観音を配する。

これらの観音像を簡単に説明すると、聖観音は前述の通りであるが、千手観音は頭上に九ないし十面の仏面を乗せ、千本の手をつけるものもあるが実際には合掌体で両側に二十の脇手を合掌の下に宝珠を乗せた手を置く例が多い。馬頭観音は別項で説明したのでここでは重複をさけ、次に十一面観音は頭上に菩薩面が三つ、忿怒の面が三つ、牙上出相という牙が口の両端から上に向かって出ている面が三つと、後の中央に大笑する面を置くものをいう。准提（准胝）観音は三眼で左右に九本づつの脇手を出し、それぞれにいろいろの持物を持つている。不空絹索観音は頭上に阿弥陀仏の化仏をつけ、額に豎の一眼があり、合掌するが左右に三本づつの脇手があり、その脇手の一本に衆生を救う慈悲の索つまり絹索を持つているのが特徴となっている。如意輪観音はふつう六本の脇手をもつものと二本のものとがあつて、右膝を立て左膝を折って坐り、右手を頬にそえる形をしているのが特徴である。石造には丸彫のものと、切

馬頭観音（ぼとうかんのん）

石を舟形又は花弁形、丸屋根形などにし、内側に浮彫したものがあつる。一体で独立して祀られているものと、六体、三十三体並べて祀られているものなどがある。

読んで字のように、頭の上に馬の頭を乗せた観世音菩薩で後述の六観音の項で述べる六道のうち、畜生道で人々の魂を救う観音である。一般には馬と生活するなかで、馬持ちや馬に関係する職業の人々に信仰され、馬の供養や無病息災を祈願する目的で建てられている。造立された所は、馬捨て場、峠や山道の難所、集落のはずれ、道の分岐点のほか、馬の死んだ所や馬主の屋敷内などがあるが、現在裾野市の場合、道路の拡張や整備などで、一ヶ所にまとめられたり、原位置から移されたりしている例がある。

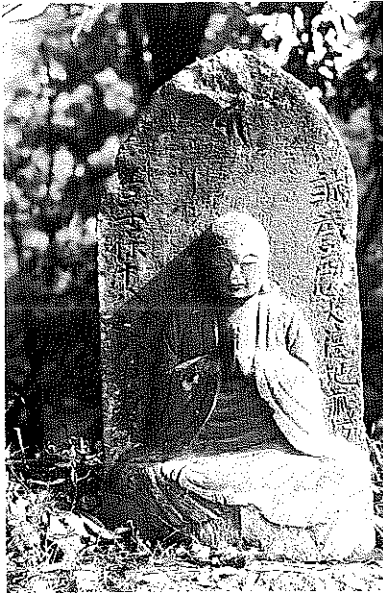
石像は切石を舟形にして、頭上に馬頭を乗せた観音を浮



彫にしたもの、同じく忿怒の面相し三面六臂（正面と左右に顔面を向け、六つの脇手を出したもの）をしていて、手に蓮華、瓶、鉢、弓、鏃、雁などを持つものを浮彫りにしたもの、自然石や石塔に馬頭観世音菩薩の文字を刻んだものがある。市内では江戸時代中頃より戦後のものまであって、数の多い石造物の一つである。

地藏菩薩（じぞうぼさつ）

本来は、釈迦の死んだ後に弥勒菩薩が現われるまでの無仏の間に、この世に現われて人々を救つてくれるという仏であったが、日本では平安時代中期以後、浄土信仰と末法思想が合わさって、生前の所業や因縁によって生死をくり返す六つの迷いの世界、つまり六道から、その苦しみを救い福利を与えてくれる仏と信じられ、人々に広く信仰されるようになった。近世に入ってから民間信仰と結びつき、



火よけ、盗難、病気、怪我、厄よけ、身代り、安産、子育てなど、人々のあらゆる願いをかなえてくれる仏として信仰され、地藏講という信仰集団も成立した。

地藏菩薩像は、一般には円頭が特徴で右手に錫杖しゃくじょうを左手に宝珠を持つ姿が最も多く、両手を胸のところまで合わせた合掌がこれにつぐ。切石に丸彫にしたものと、切石を舟形または花弁形にして、内側に浮彫にしたものがある。立像が多く座像または腰掛けて片足をまげたいわゆる半跏趺座像もある。

本報告書では、明らかに個人の墓碑として建てられたものと墓地内にあるものは採録しなかった。

六地藏（ろくじぞう）

地藏菩薩が六道をめぐって転生する衆生（人々）を救うというところから、六種類の地藏を信仰の対象にしたもの。六種類の地藏をどのように考えだしたかについては諸説があり、また持物や指の組み方にも違いがある。近世の六地藏は、仏像絵図からとったものが多いとする。

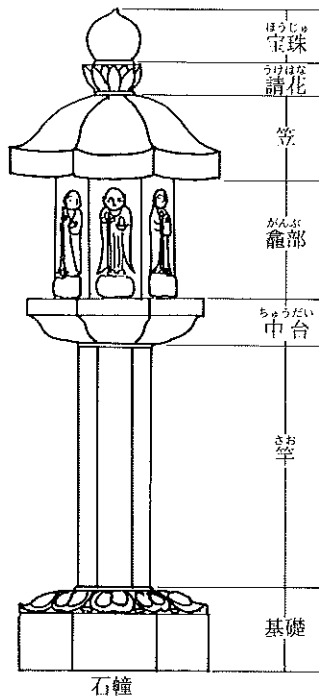
石造の六地藏には、丸彫にして六体を並べたものが最も多く、切石を舟形または花弁形にして内側に浮彫にしたものを六体並べたもの、一石に六体浮彫にしたものなどがある。また六角形の石塔の各面に六体の地藏を浮彫にしたものを六地藏石幢または六地藏幢と呼んでいる。

仏像絵図からとったという六地藏のうち、両手に数珠を持ったものが地持地藏、右手の五指をそろえて肩の高さま

であげ、手のひらを前にむけ、左手はさげて手のひらを前にし、若干指をまげたものが陀羅尼地藏、両手を胸の位置で合せた合掌形のもが宝性地蔵、右手に錫杖、左手に如意の宝珠を持ったものが鵜亀地藏、両手で柄のついた香炉を持ったものが法性地蔵、両手で旗（幢幡）を持ったものが法印地藏とされている。

石 幢（せきどう）

石幢というものには六角柱または八角柱の幢身を本体として、基礎、幢身、笠、宝珠と組みたてたものと、基礎、反花座、六角ないし八角の塔身（竿）、中台（うけ）、龕部、笠、宝珠と組みたてたものの二形式があって、前者の幢身または後者の龕部に仏像、主に六地藏尊を浮彫したものが多い。石幢は幢身に経文を刻んだ経幢といわれたものであったが、本来は石幢自体が仏身であって塔婆であったと



いう。

幢というのはたれ幕のことであるから、六角形ないし八角形の枠組に宝珠のついた笠をのせ、各枠面にたれ幕をつけた中に仏像を祀ったものがあったのではないかと思われる。また龕というのは仏像を納める厨子のことである。

不動明王（ふどうみょうおう）

明王というのは、大日如来の命令を奉じて忿怒の形相をし教化のむづかしい衆生やいろいろな悪さをする鬼などを、説得し降伏させる仏という。また大日如来の分身ともいわれる。この明王のいちばん代表的なものが不動明王とされ、火炎のなかにあってすべての罪障（成仏のさまたげとなる障害）を打破り、動揺しないので不動といわれているとされる。不動明王には八大童子（杓羯羅、制吒迦、慧光、慧喜、烏俱婆迦、清浄比丘、阿耨達、指徳）が付属



しているが、ふつうには矜羯羅と制吒迦の二童子がついているものが多い。この明王は本来の教え救済のほか、病氣治癒、安産、水神、防災（水害・火災）、怨敵降伏、財福を得るなど諸願をかなえてくれる仏として広く信仰され、不動講という講もつくられている。

石像には丸彫一体のものと童子を従えた三体のもの、切石を整形してその内側に浮彫にしたものがあるが、背に火炎を刻し右手に剣左手に絹索を持つ姿が特徴となっている。

弁財天（べんざいてん）

大弁財天女、妙音天、美音天のほか大弁財功德天ともいわれ、略して弁財天、弁天様ともいわれている。もとはインドの河の農業神として尊敬され、後に仏教にとり入れられて音楽や智慧の神となり、日本では中世以後に七福神の一員となって、福德の神として広く信仰されている。

姿かたちは天女形で、一般には琵琶を持っているが、本来は八つの脇手があつて、弓、箭、刀、稍（騎兵の持つ矛）斧、長杵、鉄輪、絹索を持つ。もともと川の神、農業神という性格から灌漑に係る用水池、沼、用水源となる川などの岸边に水神として祀られる。石像には丸彫や切石に浮彫として刻まれる。

羅漢（らかん）

阿羅漢の略で、悟りを開き功德がそなわり、尊敬や供養を受けるに値する修業僧の最高位の称号。



このなかで十六羅漢というのは仏の命で、長くこの世にとどまって仏法を護るといふ、賓頭盧尊者次下十六人の尊者をいう。

五百羅漢というのは、釈迦の弟子で阿羅漢の称号を受けた聖者をいい、釈迦の死ぬ時にその傍らに結集し、その教えをまとめるため、それぞれの道に向かったとするが、個々の名前や事跡は明らかでないという。

羅漢像は丸彫座像が多い。

日天・月天（にってん・がってん）

仏教で上下、日月、四方、四維を守る神々の一つ。梵天（上）、地天（下）、日天（日）、月天（月）、帝釈天（東）、水天（西）、焰摩天（南）、毘沙門天（北）、水天（東南）、羅刹天（西南）、風天（西北）、伊舎那、大自在天（東北）の十二天の中にあつて、日天は日天子の略号で日宮殿に住

み、帝釈天の内臣とも観音菩薩あるいは大日如来の化身でもあるという。月天は月天子の略号で月宮殿に住み、春夏秋冬を照らすという。裾野市のものは自然石に文字を刻む文字碑である。

鳥居（とりい）

神社の参道入口に建てて、神域を示す石造物であるが、本来は本造で皮つきの掘立柱を左右二本建て、上に笠木を渡し、その下に間隔をあけて左右の柱を連結する貫木を入れたものである。

鳥居には三つの形態があつて、その一つは二本の柱を左右垂直にたて、それに笠木をのせ貫を連結させるが、両端を柱の外に出さないもので、神社名の額を中央にかかげない。これを神明鳥居といひ最も古い形で簡素なものである。次は二本の柱を転びといて左右内側に傾けて建て、笠木の両端を上にもらしてその下に鳥木という受け木を入れ、貫が左右の柱の外に出したもので、鳥木と貫の中央に神社名を書いた額をかかげる。この鳥居を明神鳥居という。この明神鳥居の笠木を受けの鳥木の全体が大きく反り上がった形の鳥居を稲荷鳥居という。

神明鳥居は伊勢神宮や鹿島神社に建てられ、明神鳥居は春日神社、八幡神社に建てられた形式とする。

結界石（けっかいせき）

寺院の境域を示す標識の石塔を指し、寺院寺域の一切の

支配を排除し独立不入を示すためのものとされる。禅宗寺院の山門に建てられている「不許輩酒入山門」の文言を刻んだ石塔も結界石といっているが、別にこれを戒壇石あるいは禁制石といつて、仏道修行のさまざまになる酒食は入れないことを示すためのものであるという。

手洗石（ちやうずいし）

神社の参道わきに置かれてあるもので、自然石または切石の上面をうがって水を入れ、参拝者の手を洗って清めるようにしたもの。氏子あるいは信者の奉納したものが多い。

層塔（そうとう）

屋根を三、五、七、九、十三と奇数に重ねた石造の塔を層塔と呼んでいる。普通には四角形であるが、六角形、八角形のものもある。構造（形態）は基壇を裾え、その上に格狭間を入れた基を置き、塔身（層となった屋根部）、笠伏鐘、請花、層輪、宝珠の順となっている。

層塔は仏教でいう塔婆で、本来は仏舍利を納めたものであったが、転じて経典を納めたり仏像を塔芯に安置するようになった。近世、造塔者は主として祈願や供養塔のために建てたものもある。

佐野原神社本殿後ろにある層塔は、この地で戦死したという二条爲冬の霊を供養するために建てられたものであるといわれている。

万靈塔（ばんれいとう）

仏教では、この世のすべてのものに靈（万靈）があり、この万靈を一つの塔に宿らせ、この塔を回向（えうこう）することによって万靈を供養することができる。万靈塔というのは、この目的で建てられるので、寺院の門前、境内などの人の目につき易いところにある。

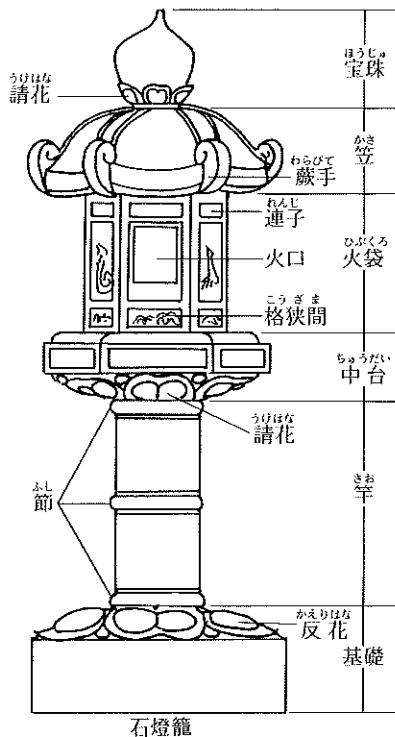
自然石や切石に「万靈塔」と刻まれるが、「三界万靈塔（等）」、「法界万靈塔」と刻まれたものもあり、意味や内容は同じである。三界というのは欲望のはげしい欲界（六道の地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天）と、欲界ほどではないが、微妙な形のある色界と、そして形をはなれて心だけがある無色界の三つの世界を指し、一切のものが生き滅びし流れ転ずる世界であるとされる。法界も三界と同じ意味があるという。また十界というのがあるが、十界とは地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天上界に声聞界、



縁覚界、菩薩界、仏界の加ったもので、天地宇宙いっさいの世界をさすとされている。

石灯籠（いしどうろう）

石造で社寺の前にすえて燈火をとすもの。上から宝珠・笠・火袋・中台・竿・基礎の名稱があり、それぞれの各部位に裝飾的彫刻を施す。祈願のため奉納されたものが多い。



常夜塔（じょうやとう）

道路の傍、交差点・集落の入口などに設置され、常夜、灯をつけ夜の歩行を便利にした燈籠。火伏の神の秋葉信仰と合体し、塔部に秋葉山常夜燈と刻したものが多い。宝珠・笠・火袋・中台、中台を支える竿部が方形で、下部の基礎に向かって広がり安定感がある。

字体について

石造物の調査で刻まれた文字を読み記録することは、最も重要な作業の一つであるが、風化し磨滅して判読できないものがあるほかに、一般の漢和辞典にはない文字があつて、読めない場合がある。そこで調査現場ではその文字を刻まれた通りに写し取って持ち帰り、石造物の調査、研究書、或いは石文字体の研究書などに記載された判読字体と照合して読むということになる。このように石造物に刻まれた文字で、漢和辞典にない文字や、一般には使われない文字を異体文字と呼んでいる。

異体文字は金石文に使われていることが多いが、裾野市内の石造物に刻まれた異体文字をみると、本字つまり元の原字体を省略したり、簡略化した字が多い。これは石工が、使用した石の質の關係から原字体では刻みにくいか、欠けてしまふとか、或いは手間がかかるという理由で、省略、簡略化した字を刻んだのではないかと思われる。特に硬質の玄武岩を用いた石造物の字体をみると、画数を省略した文字がよくみられる。

本報告書作成の過程で、衆を衆、示、歸(婦)を皈としたものなどを異字・應を応としたものなどを略字、大庭氏を大葉、瀬戸氏を勢戸としたものを換え字とし、これらのなかで読めないものは当用漢字に直した。旧漢字でも一般に読めるものはそのままとしたが、特に読みにくいもの、それから行書体の字、草書体の字、くずし字などは、印刷の關係上、当用漢字とした。異字、略字、換え字などの一覧表は下巻末尾に記載することにした。

引用参考文献

- 石田茂作「仏教考古学論改」二、四 恩文閣 昭五二
「日本考古学講座」7 歴史時代 河出書房 昭三一
倉田文作「仏像のみかた」第一法規出版KK 昭五四
庚申懇話会編「日本石仏辞典」第二版 雄山閣 平五

裾野市史編さん室関係者

◇市史編さん専門委員

- 有光 友学 横浜国立大学教授
 高橋 敏 国立歴史民俗博物館教授
 中野 国雄 日本考古学協会会員
 福田アジオ 国立新潟大学教授
 四方 一瀾 国士館大学教授
 安田 常雄 国立電気通信大学教授

◇市史編さん調査委員

- 岩崎 信夫 都立目黒高等学校教諭
 坂本 紀子 早稲田大学大学院博士課程
 湯川 郁子 一橋大学大学院特別研修生
 岩田 重則 東京学芸大学講師
 厚地 淳司 静岡県立沼津東高等学校教諭
 井口 俊晴 加藤学園暁秀高等学校教諭
 菊池 邦彦 都立航空工業高等学校助教授
 柴 雅房 静岡県立沼津城北高等学校教諭
 関根 省治 静岡県立富士宮北高等学校教諭
 東島 誠 東京大学大学院博士課程
 松崎 真吾 湘南学園中等学部非常勤講師
 仁藤 敦史 国立歴史民俗博物館助手

◇地区協力委員（ ）内は市内地区名

- | | |
|-------|---------------|
| 伊東 誠司 | 一橋大学大学院博士課程 |
| 西川 尚男 | 沼津市立長井崎中学校教諭 |
| 瀬川裕市郎 | 沼津市歴史民俗資料館学芸員 |
| 新谷 尚紀 | 国立歴史民俗博物館助教授 |
| 杉村 斉 | 三島市郷土館館長 |
| 斉藤 弘美 | 日本民俗学会会員 |
| 松田香代子 | 日本民俗学会会員 |
| 宮村田鶴子 | 日本民俗学会会員 |
| 植松甲子男 | 西地区 (石脇) |
| 杉山 光正 | 〃 (佐野) |
| 加藤 信雄 | 〃 (大畑) |
| 水口 清文 | 〃 (二ツ屋・新田) |
| 歌崎 久作 | 〃 (定輪寺) |
| 田口 勝夫 | 〃 (富沢) |
| 水口 忠栄 | 〃 (伊豆島田) |
| 関野 政雄 | 〃 (水窪) |
| 中西 保男 | 〃 (二本松・新田) |
| 杉山 繁雄 | 東地区 (久根) |
| 藤原 善次 | 〃 (稲荷) |
| 清水 四郎 | 〃 (茶畑) |
| 芹沢 文 | 〃 (茶畑) |
| 飯塚 政高 | 〃 (麦塚) |

星野 直司	東地区	(平松・新田)
大庭 三郎	深良地区	(深良・南堀)
倉沢 秀雄	"	(深良・町震)
小林 秀年	"	(深良・上須)
長田 稔	"	(深良・新田)
高橋 利治	"	(深良・原)
一之瀬和雄	"	(深良・切遠)
藤森 茂良	"	(深良・上原)
増田 一男	"	(深良・和市)
西島 秀雄	富岡地区	(千福)
西島 義禮	"	(千福)
土屋 誠吾	"	(御宿・新田)
勝又 茂美	"	(御宿・入谷)
勝又 秋男	"	(御宿・上谷)
勝又 常一	"	(葛山)
芹澤 正己	"	(葛山)
柏木 仁	"	(上ヶ田)
杉本 隆彦	"	(今里)
真田 林蔵	"	(下和田)
杉山 末雄	須山地区	(須山)
手綱 拓史	"	(須山)

◇事務局

芹澤 仁	教育長
横山 哲也	教育次長
藤森 秋親	市史編さん室長
米山富美子	主席主査
市田 弘志	主査
亀崎 浩子	主事
濱田 明	事務職員
永野 武信	事務職員
今関 裕美	事務職員
山本けい子	臨時職員
長田 文代	臨時職員

◇調査協力者

長谷川 博
泉谷 美保
藤本 政子
野村美穂子
勝又 仁美
窪田 紀子
鈴木 康代
勝又 治枝
山之内マス子

山入アヤ子
境野 仁子

県立裾野高等学校郷土研究部

参考文献

- | | | | |
|--------------|----------|-----|--------|
| 「日本石仏事典」 | 庚申懇話会 | 雄山閣 | 平成五年 |
| 「石仏図典」 | 日本石仏協会 | 雄山閣 | 平成三年 |
| 「図解・仏像のすべて」 | PHP研究所 | | 平成四年 |
| 「漢字異体字典」 | 日外アソシエーツ | | 平成四年 |
| 「梵字手帖」 | 徳山暉純 | 木耳社 | 昭和六十二年 |
| 「裾野市の石造物」 | 飯塚良之 | | 平成二年 |
| 「庚申塔アラカルト」 | 安田 弘 | | |
| 「葛山の久保川と雷神社」 | 柏木 勲 | | 平成四年 |

裾野市史調査報告書第七集

裾野の石造物

平成八年三月二十五日

編集 裾野市史専門委員会
発行 裾野市教育委員会市史編さん室

裾野市茶畑三九九
電話 〇五五九―九三―七七一〇

印刷 みどり美術印刷株式会社

題字 石田義明